

533  
246



始



533

246

茶 上 野  
茶 上 野





一  
生

內村  
賢鑑  
造三  
編著

大正  
15. 11. 27  
內交



## 序文

一日は貴い一生である、之を空費してはならない。そして有効的に之を使用するの途は神の言を聽いて之を始むるに在る。一日の成敗は朝の心持如何に由て定まる。朝起きて先づ第一に神の言を讀みて神に祈る、斯くなして始めし日の戦は勝利ならざるを得ない。縦し敗北の如くに見ゆるも勝利たるや疑なし。そして斯かる生涯を終生繼續して一生は成功を以て終るのである。

此書を作るに方て著者と編者とが模範とせしは世界的に有名なボーガツキー著『寶の櫃』(Bogatzy's Golden Treasury)である。靈魂の毎日の糧として聖句に附するに著者の感想を附せしものにしてボーガツキーの此著に及ぶものはない。而して我等の編著成りて

之を此世界的名著に較べて見て我等に慚愧なき能はずである。たゞ或は無きに勝るならんと信じ之を世に出す次第である。願くは聖靈我等の足らざるを補ひ、我等と我等の努力とに相應する恩恵を施し、此書を用ひ給はんことを。

大正十五年(一九二六年)九月七日

信濃淺間山麓赤岩の山莊に於て誌す

内村鑑三

例言

一 本書は讀者をして聖書中の重要な節句を熟讀味解せしめんために編纂せられしものである。但し編纂の手續より云へば、編者は著者の重なる著作中より比較的優秀なりと信する箇處を拔萃し、次に之と相適應する節句を舊新約兩聖書中より選取して一頁内に併記したのである。讀者もし本書の示す處に従ひて、毎日一頁づつを反覆熟讀し、一年にして之を讀了するときは、その靈性に於て少からぬ進歩のありしを経験するであらう。

二 本書編纂のために用ひしものは、著者の著作全部に亘つては居ない。即ち著者の著書中、所感十年、研究十年、研究第二之十年、舊約十年、感想十年、基督教問答、復活と來世、洪水以前記、獨立短言、基督信徒の慰、求安錄、宗教座談、傳道の精神の十三書を用ひたのである。或はこの餘の

著作を用ひて第二の『一日一生』を編する日あるかも知れぬ。

三 各文章の最後に記したる括弧内の細字は、その文章を収むる所の著作を略語を以て表示したものである。即ち左の如くである。

所感——所感十年。 研——研究十年。 研二——研究第二之十年

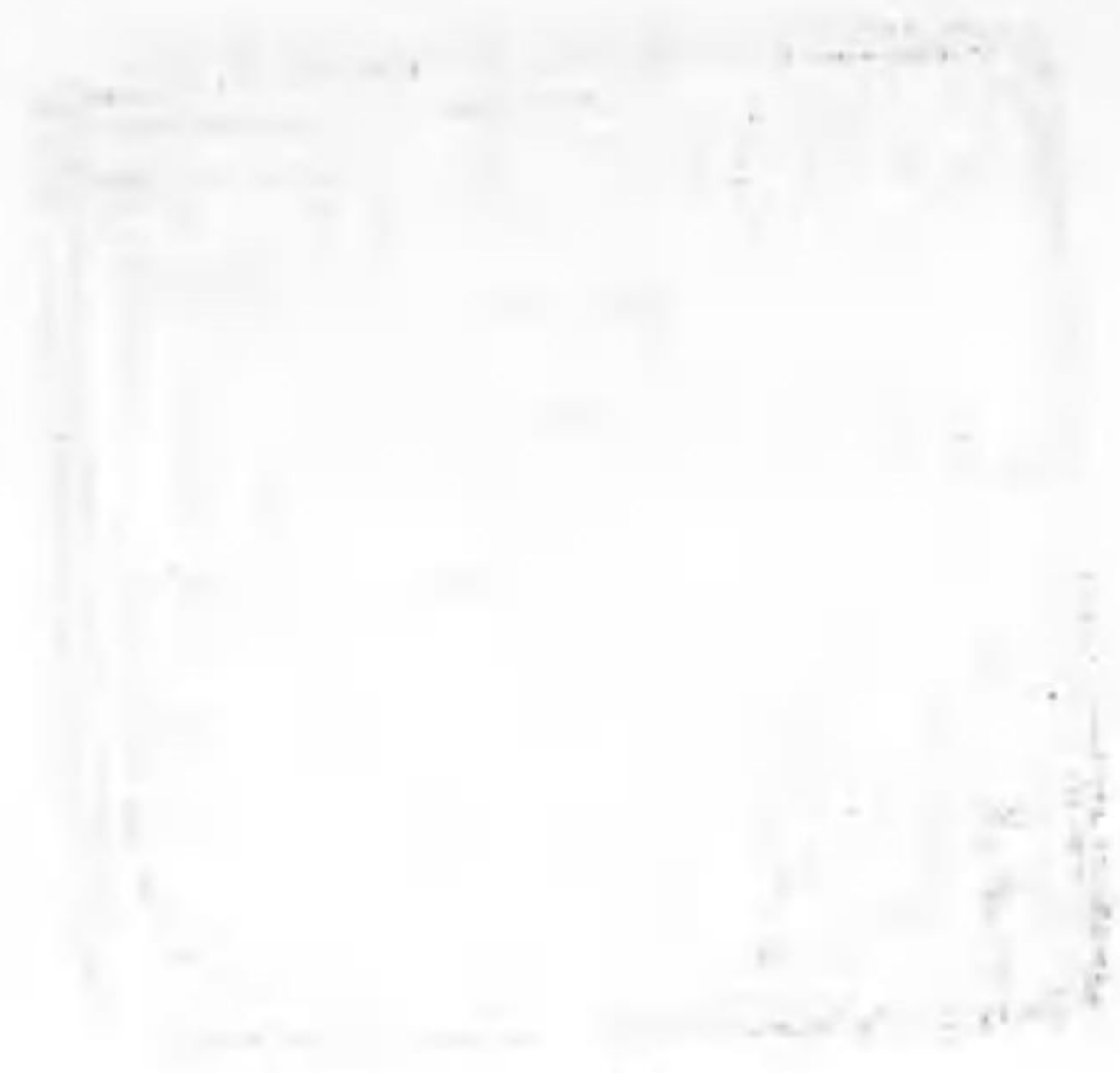
舊約——舊約十年。 感想——感想十年。 問答——基督教問答

復活——復活と來世。 洪——洪水以前記。 獨短——獨立短言

慰め——基督教徒の慰。 求安——求安錄。 座談——宗教座談

傳道——傳道之精神。

四 本書編纂の方針は著者の意より出でたものであり、著者の文章よりの拔萃とそれに相應する聖句の選擇とは、専ら編者に於てなした所である。又文章の斧正及び校正は、著者編者二人の共力に成つたのである。責任の所在を明かにするため此事を記して置く。



元始に神天地を創造りたまへり。(創世記一章一節)



生一日一

「元始に神天地を創造りたまへり」此一節に基督信者の宇宙觀と人生觀との全部あり。宇宙大なりと雖も、是れもと神に由て造られしもの、故に神が之を變更し、又は改造し、又或る場合に於ては其運行を中止し、又は之を早め得るは勿論なり。既に神の造りし宇宙なり、されば是れ我父の園にして我れ其中に住して恐怖あるなし。我れ我國を去て他國に行かんか、神必ず其處にあり。我れ此地球を去て木星又は水星に至らんか、彼れ必ず其處にあり。彼はオライオン星にあり、ブライヤガスターにあり。而して遠く此宇宙を離れ他の宇宙に至るも、我父はまた其處にあり。神と和し神の子となりて、宇宙は美はしき樂園となるなり。我れ其處に彼の偉業をたへ、口に彼の榮光を唱へながら、死の睡眠につけば、彼は再び彼の聖手に我を受け、我をして新しき天地と新しきエルサレムとに於て永久に彼の聖名を稱ふるを得しめ給ふ。(洪)

神言ひ給ひけるは、我等に象りて我等の像の如くに我等人を造り、之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の凡の昆蟲を治めしめんと。神その像の如くに人を創造り給へり、即ち神の形の如くに之を創造り之を男と女に創造り給へり。(創世記一章二六、二七節)

「神はその像に従て人を造り給へり」と。又「真正の神殿は人なり」と。又「汝等は神の殿にして神の靈汝等の中に在す」と。然らば人の體軀は宇宙に象て造られしものか。而して宇宙もし神の體にして、人もし宇宙に象て造られしならば、人は彼の外形に於ても亦神の像を現はすものにあらずや。神よ願くは我がこの氣儘なる想を許し給へ。我は汝を人類視 (anthropomorphize) せんとするに非ず。我は人を汝が彼に與へ給ひし適當の高位にまで引き上げんとするなり。人は彼自身肉體を見るに常に卑賤の念を以てし、之を獸類のそれに比し、單に肉塊なりと稱し、その如何に貴重にして如何に神聖なるものなるかを知らざるなり。彼は彼の體を汚す時に、神の像を汚すものなる事を知らざるなり。聖なるかな、聖なるかな萬軍の主エホバよ。我等の體は實に汝の像に象られて造られし聖き神殿なるにあらずや。(洪)

狼は小羊とともに宿り、豹は小山羊とともに臥し、犢、牡獅子、肥えたる家畜ともに居りて、小さき童子にみちびかれ……かくてわが聖き山の何處にても害ふことなく傷ることなからん。そは水の海をおほへる如く、エホバの知識地にみつべければなり

(イザヤ書十一章六、九節)

恩恵の露、富士山頂に降り、滴りてその麓を霑し、溢れて東西の二流となり、その西なる者は海を渡り、長白山を洗ひ、崑崙山を浸し、天山、ヒマラヤの麓に灌漑ぎ、ユダの曠野に到りて盡きぬ。その東なる者は大洋を横斷し、ロツキーの麓に黄金崇拜の火を滅し、ミシシピ、ハドソンの岸に神の聖殿を潔め、大西洋の水に合して消えぬ。アルプスの嶺は之を見て曙の星と共に聲を放ちて謠ひ、サハラ砂漠は喜びて蕃紅の花の如くに咲き、斯くて水の大洋を覆ふが如くエホバを知るの知識全地に充ち、此世の王國は化してキリストの王國となれり。我は睡眠より覺め、獨り大聲に呼はりて曰く、「アーメン、然かあれ、聖旨の天に成る如く地にも成らせ給へ」と。(所感)



エツサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて實をむすばん。その上にエホバの靈とまらん。これ智慧聰明の靈、謀略才能の靈、知識の靈、エホバをおそるゝの靈なり。(イザヤ書十一章一、二節)

百萬の貔貅邊塞を成り、シーザーの宮殿に絃聲高くして、驍勇恩賞に誇りし時、神は其子をベツレヘムの丘上、牛羊、槽中に其食を探ぐる所に降し給ひて、人類救済の途を開き給へり。革新の世に臨むや常に此の如し。世は擧て之を帝王と軍隊とに待ち望む時に、神は貧兒を茅屋の下に降して、世に新紀元を開き給ふ。今や復たび革新の聲高し。我等をして東方の博士に倣ひ、我等の救主を求めんが爲にロマに行かずしてベツレヘムに詣らしめよ。(所感)

エホバかくいひ給ふ、おほよそ人を恃み肉をその臂とし心にエホバを離るゝ人は詛はるべし。彼は荒野に棄られたる者の如くならん。彼は善事の來るをみず、荒野の燥きたる處鹽あるところ人の住ざる地に居らん。おほよそエホバを頼みエホバを其恃とする人は福なり。彼は水の旁に植たる樹の如くならん、其根を河にのべ炎熱きたるも恐るゝところなし。その葉は青く亢旱の年にも憂へずして絶えず果を結ぶべし。(エレミヤ記十七章五―八節)

善とは神なりとせば、悪とは勿論神を離るゝを云ふなり。盗む、殺す、姦淫するは、神を離れし結果にして罪そのものにはあらざるなり。我人を殺す時に國法の我を罰するは、私の犯せし殺人罪其物の爲めに非ずして、我れ我が神を捨てしが故なり。神我と共にあり、我神と共にある時、我罪を犯さんとするも犯し能はざるのみならず、罪てふ念は我に存するなし。私の不完全なる、私の他人を賤しむる、私の慾情の爲めに使役せらるゝ、私の傲慢なる、私の人を愛せざるは、皆悉く我れが神を離れしが故なり。故に我にして若し神に歸るを得ば、我は善人となり得るなり。罪より免るゝ途只此一途あるのみ。(求安)

彼は暗きの權威より我等を救出して其の愛子の國に遷し給へり、我等その子によりて贖すなはち罪の赦を得るなり。(コロサイ書一章十三、十四節)

基督教化されんと欲してキリストに來りし者は、必ず彼を棄るに至るべし。新らしき思想を得んと欲し、又廣き交際に入らんと欲して彼に來りし者も、亦彼を棄るに至るべし。其罪を贖はれ其靈魂を救はれんと欲して彼に來りし者のみ、能く永久に彼と偕に止まるを得べし。或ひは審美的に、或ひは哲學的に、或ひは交際的にキリストを求むる者は終に彼と離れざるを得ず。世の所謂求道者なる者は深く此點に注意するを要す。(所感)

これ汝等が信仰によりて行ひ、愛によりて勞し、我等の主イエスキリストを望むによりて忍ぶことを我等の父なる神の前にて斷えず念ふが故なり。神に愛せらるゝ兄弟よ、またこれ汝等の選ばれたる事を知るによりてなり。(テサロニケ前書一章三、四節)

信とは神の誠信を信するの信なり。望とは復活と永生と來らんとする神の王國とを望むの望なり。愛とは十字架に釘けられ、死して甦りしキリストに於て顯はれたる神の愛なり。世に勝つ者は此の三つのものなり。(所感)

神はその生み給へる獨子を世に遣し我らをして彼によりて生を得しむ、是に於て神の愛われらに顯はれたり。われら神を愛するに非ず、神われらを愛し我らの罪のために其子を遣して挽回の祭物とせり、これ即ち愛なり。(ヨハネ第一書四章九、十節)

神は愛なり、故に神が我らに賜ふ最大の恩賜は愛である。神は必しも我等に權能を賜はない、彼はイエスに之を賜はなかつた。神はその愛子が敵に嘲られ、罵らるゝ時に方ても、彼に天より萬軍を召びて之を滅ぼすの權能を賜はなかつた。イエスは窘めらるれども、自ら謙りて口を開かず、屠場に牽かるゝ羔の如く、毛を剪る者の前に黙す羊の如くにして其口を開き給はなかつた。然し神は其時に著しく愛を彼に與へ給うた。彼をして十字架の上より「父よ彼等を赦し給へ、その爲す所を知らざるが故なり」と叫ばしめ給うた。十字架に釘けられしイエスには、己を救ふに足るの能力さへなかつた。然し彼は神の子であつた。愛のほか、何物をも有ら給はざりし弱き、援なき者であつた。(研)

われ常にエホバをわが前におけり。エホバわが右にいませばわれ動かさるゝことなかるべし。この故にわが心はたのしみ、わが榮はよろこぶ。わが身もまた平安にをらん。

(詩篇十六篇八、九節)

此懦弱き肉體、是れ何をか爲し得ん。此罪惡の社會、是れ亦何をか爲し得ん。此身に省み、此社會に依り頼みて吾等は失望せざるを得ず。我が扶助は天地を造り給へるエホバより來る。彼に量り知られざるの能力ありて存す。而して我は亦我が心の門戸を開きて我を充たすに彼の大能を以てするを得べし。彼れ亦火と靈とを以て、天の變と地の異とを以て我が業を助く。我に此の内外の援助ありて我は獨り全世界に當ると雖も疑懼の念を懷かざるべし。(所感)

それ人の情は其中にある靈のほかに誰か之を知らんや、斯くの如く神の情は神の靈のほかに知るものなし。我等の受けしは此世の靈にあらず神より出づる靈なり、これ神の我等に賜ひし所のものを知るべきためなり。(コリント前書二章十一、十二節)

余輩はモーセ、イザヤ、エレミヤ、イエス、パウロ等に由て唱へられし古き舊き唯一神教に歸らざるを得ないものである。之に元始に天地と其中にある萬物を造り給ひし神がある。之に又インマヌエルと稱へられて人類と共に在し給ふ神がある。而して二者は二つの神ではない、同一の神である。宇宙を造り、其上に在り、其中に降りて之を保育し給ふ神である。此神は自然神教の供するが如き高きに居りて、宇宙と人生とに干與はらざる無情無感の神ではない。さればとて宇宙の中に閉籠められて、天然以外に何事をも爲し得ざる神ではない。彼は宇宙を造つて宇宙よりも大なる神である。宇宙を以て徐々として自己を顯はし給ふ神である。彼の意志が人の道である。人は宇宙に由て大に神に就て知る所があるが、彼の意志は之を直に彼に就てのみ識ることが出来る。(研)

なんぢは祭物をこのみたまはず、もし然らずば我これをさげん。なんぢまた燔祭をも悦びたまはず。神のもとめ給ふ祭物はくだけたる靈魂なり。神よなんぢは碎けたる悔いしころを貌しめ給ふまじ。(詩篇五一篇十六、十七節)

事業とは我等が神にさぐる感謝の献げ物なり。然れども神は事業に勝るる献物を我等より要求し給ふなり。是れ即ち碎けたる心、小兒の如き心、有の儘の心なり。汝今事業を神にさぐる能はず、故に汝の心をさげよ。神の汝を病ましむる多分此の爲めならん。汝はベタニヤのマルタの心を以てキリストに事へんと欲し、供給のことも多くして心いりみだれ(ルカ傳十章四十節)たるなるべし。故に神は汝にマリヤの心を與へんが爲めに汝をして働き得ざらしめたり。

手にもものもたで 十字架にすがる  
とは汝の常に歌ひし處にして、其深遠なる意義を知らんがために、汝は今働くこと能はざるなり。(慰め)

縦ひいくさびと營をつらねて我を攻むるとも、わが心おそれじ。たとひ戦闘おこりて我を  
せむるとも我になほ恃あり。われ一つの事をエホバに請へり、我これをもとむ、われエホ  
バの美しきを仰ぎその宮をみんながために、わが世にあらん限りはエホバの家にすまんとこ  
そ願ふなれ。(詩篇二七篇三、四節)

産を失ふも可なり、願くは神の聖顔を失はざらんことを。病に悩むも可なり、  
願くは神の聖旨を疑はざらんことを。人に棄てらるゝも可なり、願くは神に棄ら  
れざらんことを。死するも可なり、願くは神より離れざらんことを。神は我がす  
べてなり。神を失うて我は我がすべてを失ふなり。我等に父を示し給へ、然らば  
足れり。我が全生涯の目的は神を視、彼を我が有となすにあり、其他にあらす。

(所感)

蓋われ内なる人に就ては神の律法を樂しめども、わが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ  
我を擣にして我が肢體のうちにをる罪の法に従はするを悟れり。噫われ困苦人なる哉、こ  
の死の體より我を救はん者は誰ぞや。(ロマ書七章二二—二四節)

人は罪を犯すべからざるものにして、罪を犯すものなり。彼は清淨たるべき義  
務と力を有しながら、清淨ならざるなり。彼は天使となり得るの資格を備へな  
がら、屢々禽獸にまで下落するものなり。登つては天上の人となり得べく、降つ  
ては地獄の餓鬼たるべし。無限の榮光、無限の墮落、共に彼の達し得る境遇にし  
て、彼は彼の棲息する地球と同じく、絶頂(Zenith)絶下(Nadir)兩極點の中間に  
存するものなり。降るは易くして登るは難く、降れば良心の責むるあり、登るに  
肉慾の妨ぐるあり。我が願ふ所のもの我これを行さず、我が惡む所のもの我これ  
を行ふ。我は二個の我より成立するものにして、一個の我は他の我と常に戦ひつ  
ゝあり。誠に實に此一生は戦争の一生なり。(求安)

一切のもの神より出づ。かれキリストにより我等をして己と和がしめ且その和がしむる職を我等に授く。即ち神キリストにありて世を己と和がしめ其罪をこれに負せず且和がしむる言を我等に委たまへり。この故に我等召れてキリストの使者となれり、即ち神われらに託なんちらを勧め給ふが如し。我等キリストに代りて汝等が神に和がんことを汝等に求めむ。(コリント後書五章十八―二十節)

罪とは神を離るゝことであり、義とは神に歸ることである事が解つて、救ひとは何であるかゞ解る。救ひとは單に罪を去つて義しき人となることではない。斯る事は又實際に人の爲し得る事ではない。救ひとは神の側より見て人を己に取り返す事である、人の側より見て背きし神に歸る事である。而して神と人との中保者なるキリストの立場より見て二者の調和を計ることである。而して神と人との場合に於ては、讓るべきは神に於て在らずして人に於てのみ存するが故に、救ひとは人をして神に和がしむることである、人を神に對する其元始の關係に引直すことである。(研)

汝等天に在るものを念ひ地に在るものを念ふ勿れ、それ汝等は死し者にて其の命はキリストと偕に神の中に藏れ在なり。我等の命なるキリストの顯れんとき我等もこれとともに榮のなかに顯るゝなり。(コロサイ書三章二―四節)

信者は天の事を念ひて地の事を念ふてはならない。其故如何となれば、彼は地に對しては既に死にたる者であつて、その生命はキリストと共に神に藏れてあるからである。然し永久に藏れてあるのではない、キリストが其榮光の復活體を以て顯はるゝ時に、我等も彼と共に榮光の中に顯はるゝのである。其事を念うて彼は地に在る肢體の慾、即ち汚穢、邪情、貪婪等に其思念を濁してはならない。天と未來とを有する信者は、地と現世とに囚はれて低き卑き生涯を送つてはならないとの意である。預言を以て高き思想と清き生涯とを獎めたる貴き言である。

なんぢら視よ我ら稱へられて神の子たることを得、これ父の我らに賜ふ何等の愛ぞ。世は父を識らず、是に由りて我等をも識らざるなり。愛する者よ、我等いま神の子たり、後如何未だ露れず、その現はれん時には必ず彼に肖んことを知る、そは我らその眞の状を見るべければなり。(ヨハネ第一書二章一、二節)

信者は今なほ救の途中に於て在るのである。神は彼に在りて善工を始め給うて、之をイエスキリストの日に於て完全うし給ふのである(腓立比書一章六節)。かるが故に我等は今完全なる能はずとて敢て悲むべきではない。我等は今罪の身を以て罪の世に在るのである。我等の外も汚れ我等の内も亦汚れて、今や完全は求めて得られざる者である。而してかゝる状態に於てあるが故に「聖靈の初めて結べる實を有てる我等も自ら心の中に歎きて(神の子と成らんこと、即ち我らの體の救はれんことを俟)のである(羅馬書八章二三節)。而して此待望は空望として了らないのである。其實現する時は必ず到るのである。キリストの再臨は單に彼の再臨に止まらないのである。信者の救の完成うせらるゝも亦其時である。(研二)

嗚呼われは禍なるかな我母よ汝なに故に我を生みしや。全國の人我と争ひ我を攻む。われ人に貸さず人また我に貸さず皆われを詛ふなり。エホバいひ給ひけるは我實に汝に益をえせしめんために汝を惱す、我まことに敵をしてその艱のときと災の時に汝に求むることをなさしめん。(エレミヤ記十五章十、十一節)

我は曾てエレミヤと共に歎じて言へり、嗚呼我は禍ひなる哉、人皆な我と争ひ、我を攻む、皆な我を詛ふなりと。然れども今に至りて我は感謝して曰ふ、嗚呼我は福ひなる哉、人皆我と争ひ、我を攻め、我を詛ひたれば我は神に結ばれて其救濟に與かるを得たりと。人に捨らるゝは神に捨はるゝなりき。人に憎まるゝは神に愛せらるゝなりき。人に絶たるゝは神に結ばるゝなりき。今に至りて思ふ、我が生涯に有りし事にして最も幸福なりし事は世に侮られ、嫌はれ、辱められ、斥けられし事にてありしことを。(所感)

汝しらざるか聞かざるか、エホバはとこしへの神地のはての創造者にして倦み給ふことなく、また疲れ給ふことなく、その聰きこと測りがたし。疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには強きをまし加へたまふ。年少きものもつかれてうみ壯んなるものも衰へおとろふ、然はあれどエホバを俟望むものは新なる力をえん。また驚のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず歩めども倦まざるべし。(イザヤ書四十章二八—三二節)

思想は凡て實現して其終末に達するものなり。人その思想の實現を見て、彼は既に彼の最終期に達せしなり。常に若からんと欲せば、常に實現せられざる思想を抱かざるべからず。青年は夢想する人なり。夢想竭き利害を知覺するに及びて彼は老物と化せしなり。常にイムポシブル(不可能)を計畫する人、常に大改革を望む人、常に詩人的にして夢想する人、常に利害の念に疎き人、常に危険を感ぜざる人、これ青年なり、壯者なり。既にポシブル(可能)を計畫し、既に溫和主義を主張し、既に散文的にして實務に着目し、利害の念に鋭く、脚下に注意するものは、彼の齡を重ねる幾回なるを問はず、彼は老物にして既に廢棄物なり。(獨短)

されば汝らの神エホバの汝等に命じたまふごとくに汝等つゝしみて行ふべし、右にも左にも曲るべからず。汝らの神エホバの汝らに命じたまふ一切の道に歩め、然せば汝らは生ることを得、かつ福祉を得て汝等の産業とする地に汝等の日を長うすることを得ん。

(申命記五章三二、三三節)

聖書に云ふ所の「天に在す爾曹の父の完全なるが如く爾曹も完全なるべし」(マタイ傳五章四八節)とは、神の絶對的完全に達し得べしといふにあらずして、神が神として完全なるが如く人も人として完全なるべしと謂ふなり。完全なる馬とは人の如く物言ひ人の如く思惟する馬を云ふにはあらずして、馬の馬たる用を完全になすものを謂ふなり。故に人に罪ありと謂ふは、人が人たるべき完全を缺くと謂ふにあり。基督教が義人一人もあるなしと謂ふは、此事を云ふなり。神が我を責むるは、我れ雨を降し得ず、日を輝かし得ざるが故にあらずして、我人を愛すべきに人を憎めばなり、我怒るべからざるに怒ればなり。(求安)



我キリストに屬する者なれば我が言は眞にして偽なし。且わが良心聖靈に感じて、我に大なる憂ある事と心に耐ざる痛ある事とを證す、若わが兄弟わが骨肉の爲にならんには、或はキリストより絶れ沈淪に至らんもまた我願なり。(ロマ書九章一—三節)

宗教家は愛國家ならざるべからず。博愛主義に則ると稱して、國家の存立すべき理由を解せず、國家の威嚴を犠牲に供して、外國宣教師の命に唯之從ふが如きは、是れ未だ宗教の大義を解せざるものなり。眞正の宗教家は皆悉く愛國者なりき。國の爲めにせざる宗教の如きは、是れ邪教として排して可なり。若し天使の形を装ふもの降りて我に一宗教を授けんとし、我に告げて「余は汝に宗教を授與せんとす。汝の愛國心を去つて之を受けよ」と曰はんか、我は其時彼に對つて曰はん「余は汝の宗教を要せず。我は寧ろ我國を守つて無宗教家として死せん。我の胸中に燃ゆる一片の愛國心、我は之に換ふべきものあるを知らず。汝我に用なし。去つて再び我に來る勿れ」と。(傳道)

われはエホバ、なんぢらの聖者、イスラエルを創造せしもの、又なんぢらの王なり。エホバは海のなかに大路をもうけ大なる水のなかに徑をつくり、戰車および馬、軍兵、武士をいで來らせ、ことごとく休れて起ること能はず、皆ほろびて燈火のきえうするが如くならしめ給へり。(イザヤ書四三章十五—十七節)

奇蹟とは何であるかと云ふに、奇蹟とは神の事蹟であること云ふまで御座います。即ち人を造り宇宙を造り給ひし神が爲し給ふ業であること云ふのであります。人間には奇蹟は出来るものではありません(特別なる神の援助を得るに非ざれば)。何故なれば彼自身の位置が自然界の一部分であるのみならず、彼は彼の墮落に依つて彼の能力の大部分を失ひましたからであります。我等は元來天然以上のものでありませんたけれども、我等が神を離れて自己に頼り出しましてより、我等は天然の奴隷と爲り下つた者で御座います。然し神は己の造つた天然を自由にすることが出来ます。神が宇宙の運行を早めやうが、遅らせやうが、それは時計師が時計の指針を自由にする事と同然で、何も驚くには足らない事でありませぬ。(座談)

然のみならず我わが主キリストイエスを識を以て最も益れることとするが故に、すべてのものを損となす。我かれの爲に既にこれ等のすべてのものを損せしかど、これを糞土の如くおもへり。(ピリピ書三章八節)

病むも可なり、余はたゞ神の聖意を知らんと欲す。貧するも可なり、余はたゞ神の聖意を知らんと欲す。人に憎まるゝも可なり。余はたゞ神の聖意を知らんと欲す。余の不幸の極は神の聖意を知り得ざるにあり。余は疾病を怖れず、貧困を怖れず、孤獨を怖れず、余はただ神に棄られて其聖意の余に傳へられざるに至らんことを怖る。神よ、願くは余に如何なる患苦の臨むことあるも、汝と余との間に靈の交通の絶えざらんことを。(所感)

モーセ、エホバにいひけるは、わが主よ我は素言辭に敏き人にあらず、汝が僕に語りたまへるに及びても猶しかり、我は口重く舌重き者なり。エホバ彼にいひたまひけるは、人の口を造る者は誰なるや、啞者聾者目明者瞽者などを造る者は誰なるや、我エホバなるにあらずや。然ば往けよ我なんぢの口にありて汝の言ふべきことを教へん。

(出埃及記四章十、十二節)

憂ふる勿れ汝朴訥の青年よ、汝は常に俊才伶俐の人に愚者として疎せられ、汝の世事に長せざるを以て不用人物として見做さるゝ事あり。而も、全能なる神は却て汝が如き者を求め、汝をして人間の思想の達し得べからざる智慧と希望と喜悦とを有せしめんと欲す。言ふを休めよ、汝俊才伶俐なる青年よ、我れ人を統御するの才あれば、我れ世の風潮を観察するの卓見あれば、我は傳道師となりて教會を組織し教理を傳播せんと。汝は宜しく傳道師たるの念を棄て、他の事業に就くべきなり(傳道)

われ父に求めん。父かならず別に慰る者を汝等に賜ひてかぎりなく汝等と偕にをらしむべし。これは即ち眞理の靈なり。世これをうくること能はず、それはこれを見ず、また知らざるに因る。されど汝等はこれをしる、それは彼汝等と偕に在り且汝等の衷にをればなり。我汝等を捨て、孤子とせずまたなんぢらに來らん。(ヨハネ傳十四章十六―十八節)

我等が基督信者となりたりと云ふは、洗禮を受けて基督教會に入りたりと云ふことではない。又は我等の智能を以てして基督教の教理を理解したと云ふことでもない。我等がクリスチャンと成りたりと云ふことは、我等が或る「聖者」を友として持つに至つたといふ事である。而かも單に或る舊き記録に於て、或る理想の人を發見したと云ふのではない、今活ける或る聖き友人を發見して其伴ふ所となつたと云ふ事である。即ち我等は大なるバラクレートス即ち一側に在る者」を得たと云ふことである。寂寞の世に在て孤獨の生涯を送るを廢めて、大なる「訓慰師」を平常の友として持つに至つたと云ふことである。(研)

汝等は世の光なり、山の上に建られたる城は隠るゝことを得ず、燈を燃して斗の下におく者なし、燭臺に置いて家にあるすべての物を照さん。かくの如く人々の前に汝等の光を輝かせ、されば人々汝等の善行を見て天に在す汝等の父を榮むべし。(マタイ傳第五章十四―十六節)

イエスの弟子は世の光である。文明の先導者である。知識の開發者である。靈光の供給者である。此事に就て疑を懐く者は無い。世の所謂基督教に迷信がないではない。所謂基督教會なる者が頑迷無智の巢窟と化したる事は幾回もある。然れども過去千九百年間の人類の歴史に於て、イエスの弟子が光明の炬火の把持者であつたことは、如何なる人と雖も疑はんと欲して能はざる所である。我は世の光なりとイエスは言ひ給うた。而して信者はイエスに代りて世を照らす者である。勿論イエスの如くに自ら光を放つ能はずと雖も、而も各自の信仰の量に循ひ彼の光を反射するのである。(研二)

エホバ智慧をもて地をさだめ、聰明をもて天を置給へり。その知識によりて海津はわきいで雲は露をそぐなり。我が子よこれらを汝の眼より離す勿れ、聰明と謹慎とを守れ。然ばこれは汝の靈魂の生命となり、汝の項の妝飾とならん。(箴言三章十九—二十二節)

詩人テニソンの最も注意せし問題は、靈魂不滅未來存在の問題なりしと云ふ。故グラッドストーン氏、亦この問題に彼の終生の思考を注ぎ、死に瀕するの際パトラーの『アナロジ』に評註を加へ、彼の豊富なる觀察と思考との結果を世に遺して逝けり。政治家にあれ、文學者にあれ、或は商賈人にあれ、職工にあれ、常に此世以上の一問題を彼の腦中に蓄へおく事は、彼の品格を高め、彼の悟性を明かにし、彼をして俗界の汚氣に觸るゝの憂なからしむるために必要なり。(獨短)

それ人眞の教を容れず耳を悦ばしむる言を好みその私慾に循ひて己が爲に師を増加ふる時來らん。かれら耳を眞理より背けあやしき談に向ふべし。されどなんぢすべての事に愼み苦難を忍びて傳道者の工をなし汝の職を盡せ。(テモテ後書四章三一五節)

宗教なる者は人類と神との間の關係を明かにする者にして、之を世に傳ふるは人類を最も幸福なる地位に立歸らしむる者なれば、此教理を世に傳ふることは、實に善の善にして、博愛事業中此事業に優るもの他にあることなし。傳道は仁人君子の職にして、之に優るの業を余輩は余の思想中に看出すこと能はざるなり。いま傳道を以て人類を神に立歸らしむるの事業となさば、其區域は實に廣且つ大なる者なり。言語を以て教理を説明するは勿論其方法の一なり。然れども説教又は筆硯の業を以て傳道事業の大部分又は全部と見做すは、大なる誤謬と謂はざるを得ず。傳道の要は凡ての方法を以て凡ての人を神に立歸らしむるにあり。(傳道)

智慧は第一なるものなり、智慧をえよ、凡て汝の得たる物をもて聰明をえよ、彼を尊とべ、さらば彼なんちを高く擧げん。もし彼を懐かば彼汝を尊榮からしめん。かれ美しき飾を汝の首に置き、榮の冠辨を汝に予へん。(箴言四章七―九節)

人は宗教と科學との衝突を云ふ、然れども我は未だ其の是れあるを認むる能はず。宗教は靈界の科學的考究の結果と云ふべく、科學は物界の宗教的觀察と云ふも可なり。吾人は宗教を攻究するに科學的方法を應用するを恐れざるのみならず、普通の科學的常識に適はざる宗教的思想は棄却して採用せず。又之と相對して、科學的研究法に宗教的精神の用なしと信する者は、未だ科學宗教兩つながらを解せざる者と謂はざるべからず。そは眞率なる心、謙遜なる心、凡ての物にまさりて眞理を愛するの心は、宗教に於ても科學に於ても最始最終の必要物なればなり。(獨短)

イエス答へて彼等に曰けるは、我まことに汝等に告げん、若信仰ありて疑はずばこの無花果に於けるが如きのみならず、この山に命じこゝより移されて海に入れよといふともまたならん、且汝等信じて祈らばねがふ所ごとく得べし。(マタイ傳二二章二一、二二節)

世に金錢の勢力あり、政權の勢力あり、知識の勢力あり、然れども未だ祈禱の勢力には及ばざるなり。是れ實に誠實の勢力にして、山をも透し岩をも砕くの勢力なり。世の大事業と稱へらるゝものは、皆祈禱の力に依て成りしものなり。祈禱の力に依らずして建てられし國家は虚偽の國家にして、永久的不變の基礎の上に据ゑられしものにあらず。祈禱の力に依らずして成りし美術に天の理想を傳ふるものあるなし。祈禱は精神的生命を得る唯一の秘訣なり。故に祈禱なきの國民より大政治、大美術、將た亦た大文學、大發見、其他大と稱すべきものゝ出で來るべき筈なし。(獨短)

キリストイエスを救はんために世に臨れり、信すべくまた疑はずして受くべき話なり。罪人のうち我は首なり、然れども我が矜恤を受けしはキリストイエスイやさきに我に寛容を悉く顯し、後かれを信じて永生を受ける者の模楷と我をなし給へるなり。

(テモテ前書一章十五、十六節)

余輩が若し自身を指してキリスト信者であると言ふならば是れ決して余輩の高徳を誇つて云ふのではない。キリスト信者とは名譽の名であるやうに思ふて居るのが抑々真正のキリスト信者でない最もよい證據である。基督信者は罪人の一種である。自身の罪深さを認めて神の赦免を乞はんがために基督の十字架に絶る者である。今でこそパウロが信者であり、ペテロが信者であつたと聞けば如何にも彼等の名譽でありしやうに思ふなれども、其當時に於ては是は彼等に取て社交的には大不名譽の事であつたのである。人の前に自分の罪人なるを表白し得ない者は決してキリスト信者ではない。然るを、キリスト信者なりしとて文明的君子となりしやうに思ふ人は、未だ基督教の初歩をだに知らない人である。(感想)

汝等かれに聞きかれの教を受けてイエスにある眞理を知しならん。汝等夙に習へる舊き人すなはち人を惑す慾の爲にやぶらるゝものを脱ぎ、また汝等の心の靈を新にし、神に象りて眞理の義と潔にて造れる新しき人を衣るべし。(エペソ書四章二―二四節)

イエスは平民である。余は平民の模範として彼を仰ぎまつる。斯く云ひて余はイエスは今の所謂平民であるといふのではない。平民とは其有つ所の位の有無、富の多少に由て定めらるべき者ではない。貴族の中にも平民あれば平民の中にも貴族がある。自己を貴ばざる者、是れが平民である。自己を何にか貴い者であるやうに思ふ者、是れが貴族である。故にイエスは平民であると言はんよりは、寧ろ平民とはイエスの如き者であると云ふべきである。すべてイエスを主として仰ぐ者、彼に罪を贖はれんとする者、是れ皆な平民である。即ち神の子としての貴尊を認むる外、其他の貴尊を悉く拒否する者、是れが眞正の平民である。(感想)

イエスキリスト我等を釋て自由を得させたり、この故に汝等かたく立ちて復び奴隸の轡に繋るゝなかれ。(ガラテヤ書五章一節)

自由は吾人の固有性にあらず。故に完全に自由ならんと欲せば、吾人は完全に自由を有する神に到らざるべからず。即ち吾人は神に依りてのみ真正に自由なるを得るなり。詩人テニソン曰く Our will is ours to make it Thine と。吾人の意志は吾人の意志を以て之を神に捧ぐべき者ならざるべからず。勿論人は不可割的個體なるが故に、如何なる場合に於ても他體に吸収さるべきものにあらず。然れども人その自由を國家の使用に供して却て國家大の自由を獲得するが如く、之を無限の神の使用に供して無限大の自由、即ち眞正の自由を享有するに至る。(獨短)

我等、汝等がキリストイエスを信する事とすべての聖徒を愛する事とを聞き、汝等の爲に祈るとき恒に我等の主イエスキリストの父なる神に感謝す。(コロサイ書一章三、四節)

信、望、愛とは三つであつて、實は一である。信なくして望は起らないが、然し望なくして信を維持することは出来ない。愛は亦望より其活動の動機を仰ぐものであるが、望絶えし後の愛は油の絶えし燈火の如くに熱と光とを失つて終にまた舊の暗黒に復るものである。望を供せずして愛を強ゆるは無慈悲である。望の足らざる信は頑固であつて冷酷である。望は三人の姉妹の中で最も女らしい者である。彼女の側に侍るが故に愛は義務の羈絆を脱して自由なるものとなる。彼女のやさしき感化を受けて、信は頑強たるをやめて温雅なるものとなる。望は天の和氣を呼んで地の澁苦を融く。望に温き涙がある。彼女は天の扉を開いて、其中に居る我等の慕ふ聖き姿を顯出するものである。(研)

汝等神に近けさらば神なんぢらに近き給はん。罪人よ汝等の手を淨くせよ。一心の者よ汝等の心をいさぎよくせよ。汝等くるしめ、哀しめ、哭け。汝等の笑を哀哭に易よ。汝等の歡樂を憂に易よ。みづからを主の前に卑くせよ、さらば主なんぢらを高くせん。

(ヤコブ書四章八—十節)

得るの快樂あり、失ふの快樂あり、生るゝの快樂あり、死するの快樂あり。愛

さるゝの快樂あり、憎まるゝの快樂あり。而して若し快樂の性質より云はんには、失ふの快樂は得るの快樂より高く、死するの快樂は生るゝの快樂よりも清く、憎まるゝの快樂は愛さるゝの快樂より深し。神を信じて如何なる境遇に處するも吾等に快樂なき能はず。只悲痛の快樂の、快樂の快樂に優る數層なるを知るのみ。

(所感)

この故に我なんぢらに告げん、生命の爲に何を食ひ何を飲みまた身體の爲に何を衣んと憂慮ことなかれ。生命は糧より優り身體は衣よりも優れるものならずや。汝等そらの鳥を見よ、稼ことなく穡ことをせず倉に蓄ふることなし。然るに汝等の天の父は之を養ひ給へり。汝等これよりも大に勝るゝ者ならずや。(マタイ傳六章二五、二六節)

世より獨立するに容易なるが故に貧者は天然と交る益々深いのである。貧とは勿論貧窮の意味ではない。貧とは人の造つた富に依らずして神の與へ給ふ恩恵に依ることである。故に貧とは空の鳥や野の百合花のやうに成ることである。即ち日光を楽しみ、清風に浴し、勞めず、憂ひ慮はざるやうに成ることである。天然の快樂なるものは貧せざれば得られないものである。詩人ラルヅナスのやうに「高き思想」を樂まんと欲すれば、亦彼の如くに「低き生涯」に甘んじなければならぬ。(感想)



それ神はその生みたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり。こは凡て彼を信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり。神の子を世に遣し給へるは世を審判んとあらず、彼によりて世を救はんが爲なり。(ヨハネ傳三章十六、十七節)

キリストは何のために世に降り給ひしかと問ふに、新約聖書が此事に關して言ふ所は明白である。即ち彼の血(死)を以て人類の罪を贖ふためである。さうして死して後に昇天し、天の門戸を開いて人の子に神の子と成るための權能を與へんためである。是れがキリストの降世の最大目的であつて、其他の事は此目的に副うた餘光である。人類の罪を贖ひ、彼の聖靈を罪に沈みし人の子の上に注がんだめの道を開かんためには、彼の愛子を遣して世をして之を十字架に釘けしむるの必要があつた。キリストの生涯を贖罪の生涯と見てのみ、新約聖書は最も満足に解釋せらるゝのである。(研)

すべてのよき賜と全き賜はみな上よりもろくの光明の父より降るなり。父は變ることなくまたまはりて顯はるゝ影もなきものなり。かれ己の旨にしたがひ眞道をもて我等を生めり、これわれらをして其の造る所のものゝなかにて初に結べる果の如きものとならしめん爲なり。(ヤコブ書一章十七、十八節)

善事とは神を信する事である、悪事とは神より離れて人と自己とに頼る事である。其他に善事もなければ悪事もない。病氣必ずしも悪事でない。若し我等を善なる神に導くならば病氣も亦善事である。健康必ずしも善事でない。若し健康が人をして自己に頼らしめ、自己を以て慧しと思はしむるに至るならば、健康は却て悪事である。貧困も同じことである。其反對の富貴も同じ事である。キリスト曰ひ給はく、汝何故に善に就て我に問ふや、一つの外に善あるなし、即ち神なり。善とは神を離れて別にあるものではない。神と神に向ふこと、是が善である。神より遠ざかり、神に逆ふこと、是れが惡である。善惡の差別は是れ丈である、然し是れ生死の差別である。(感想)

心の清き者は福なり。其人は神を見ることを得べければなり。(マタイ傳五章八節)

神は一である、故に彼は單純である。一なるが故に入組める、繁雜なる、複雜なる者でないに相違ない。清き心を以てすれば、何人にも解し得らるゝ者であるに相違ない。恰も嬰兒の如きものであつて、天真爛漫、無偽正善の者であるに相違ない。神の解し難きは彼が複雑なるが故ではない、單純に過ぎて餘りに透明なるが故である。恰も英雄の心の如く、清風霽月、一點の塵を留めざるが故に人は彼を解し得ないのである。人は容易に多くの神を信する、然し容易に獨一無二の神を信じない。純情は彼等の堪へられない所である。故に彼等は多くの不純なる神を作りて、己が不潔を蔽はんとする。(研)

この故に明日の事を憂慮なかれ、あすはあすの事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にてたれり。(マタイ傳六章三四節)

彼の言語は詩歌であつた。彼の祈禱は感謝であつた。彼の無邪氣なる、一日の勞を了へ給へば、颶風吹きすさむ波の上に漂ふ小舟の艖のかたに枕して寝ね給へりとの事である(馬可傳四章三七、三八節)。のみならず、彼が敵に付さるゝ其夜、恐るべき死は面前に迫り居りしにも拘はらず、彼は弟子等と逾越の節筵を共にし、諄々として彼等に教ふる所あり、「彼等歌を謳ひてのち橄欖山に往けり」とありて、讚美歌を以て彼等の質素なる、聖き筵を賑はしたる事が判明る(マタイ傳廿六章三十節)。實に悲哀の人なりし彼は、同時に又歡喜の人であつたのである。彼は能く悲痛を抑制するの途を知り給うた。彼れ御自身が明日の事を憂慮ひ給はなかつた。彼は未だ曾て世に在りしことなき最大の樂天家であつた。(研二)

なんぢ道を宣傳ふべし、時を得るも時も得ざるも勵みてこれを務め、さまざまの忍耐と教誨を以て人をたゞし、戒め勸むべし。(テモテ後書四章二節)

世に眞正の傳道程楽しい事はない。是れは事業中の事業であつて、一度び其快樂を味うて我等は他の事業に轉ずることは出来ない。人の靈魂を救ふことである。彼を心の根柢より革むる事である。或時は瞬間にして罪人が其罪を棄て神に還り來るのを目撃することがある。彼の家庭は潔まる、彼の妻子と姉妹とは歡ぶ、彼の生涯の方針は全く一變する。彼に依て新事業は企てられ、且つ成就せられる。一片の福音が斯くも深遠なる變化を生ぜし乎と思へば實に驚くばかりである。

(感想)

されどエホバはかれを碎くことをよろこびて之をなやまし給へり。斯てかれの靈魂罪科の獸物をなすにいたらば、彼その末をみるを得その日は永からん。かつエホバの悦びたまふことは彼の手によりて榮ゆべし。(イザヤ書五三章十節)

キリストの事業は彼の死を以て完成せり。其如く余輩彼の小なる弟子の事業も亦余輩の死を以て完成するなり。死は最大の事業なり、生涯の高極なり。人は死せずして未だ其業は就れりと言ふを得ず。誠に基督信者に生前の成功なる者あることなし。彼の事業は死を以て始まるなり。彼は肉眼を以て己が事業の成功を見る能はず。其生命を世の罪の供物となすを得て、其事業の永へに神の手に在りて榮ゆるを見るなり。(所感)

時まさに至らん今いたりぬ。汝等ちりておの／＼その屬する所にゆきたゞ我を一人のこさ  
ん。されど我ひとり居るにあらず父われと偕にをるなり。(ヨハネ傳十六章三二節)

人類のために盡さんと欲して世に交際を求むるの必要は一つもない。我等は單  
に獨り在りて人類のために盡すことが出来る。人は何人も人類の一部分である。  
故に己に盡して人類のために盡すことが出来る、獨り眞理を發見することが出来  
る、獨り神と接することが出来る、獨り靈性を磨きて完全の域に向つて進むこと  
が出来来る。我等は人類の好き標本として己を世に提供することが出来る。單獨は  
決して無爲の境遇ではない。(感想)

このうちその弟子おほく返りゆきてイエスと偕にあるかざりき。之によりてイエス十二の  
弟子に曰けるは汝等もまた去らんと思ふや。シモンペテロ答へけるは主よ我等は誰にゆか  
んや 永生のことはをもてるものは汝なり。またわれら信じて知る汝は活る神の子キリ  
ストなり。(ヨハネ傳六章六六―六九節)

キリストは余の道德的宇宙である。余は精神的には彼に在りて生き、動き、ま  
た存る者である。故に余は彼を離れて何事をもなし得ない。恰かも木から落ちた  
る猿の如き者であつて、世にキリストを離れたる余の如くに憐れなる者はない。  
キリストに従ふは余の利徳ではない、是れは今余の生存上の必要である。彼を  
離れんか、すべての恥辱と失敗とは余を待ちつゝある。余が譽れある生涯を送ら  
んと欲せば、余はキリストに縋るより他に途はない。憐むべき美むべき者とは余  
のことである。(感想)

而して我は神のたすけを得、今日にいたるまで斃るゝことなく、小さき者にも大なる者にも證をなせり。我がいふところは、預言者およびモーセが將來かならずならんといひしことにあらざるはなし。即ちキリストの苦難をうけ死にし者の復活の始となり光をこの民と異邦人に傳ふることなり。(使徒行傳二六章二二、二三節)

信者の復活の希望は自己に由るのではない、主イエスキリストに由るのである。信者は人として復活せんと欲するのではない。是れ彼が望んで能はざる所である。彼は主イエスキリストに在りて復活するのである。語を換へて云へばキリスト彼に在りて復活を繰返し給ふのである。信者はキリストの宿り給ふ所の者である。而して「我は復活なり生命なり」と云ひ給ひし彼は、信者の體に宿りて之をも復活し給ふのである(ヨハネ傳十一章廿五節)。イエスの靈の在る所には必ず復活がある。イエスの靈を接けて復活は之を自然の結果と見ることが出来る。

(復活)

かれ我等を救ひ聖召を以てめし給へり。これ我等の行に由るにあらず、惟神おのが旨と世の成らざりし先よりキリストイエスの中にわれらに賜ひし恩恵によるなり。この恩恵は今われらの救主イエスキリストの顯れ給ひしによりて顯れたり。キリスト死をほろぼし福音を以て生命とくちざる事とをあきらかにせり。(テモテ後書一章九、十節)

現世は我等の理想を行ふには、餘りに不完全なる所であります。もし此世が萬事を終るものでありますならば、人として此處に生れ來りましたのは最大不幸であると思ひます。世に辛いことゝて、理想を持つて理想を行へない位辛いことではありません。然るに凡て高尚なる人の生涯は皆な此の「充たされざる理想」の生涯であります。理想に應ふ實物の存在するのが此宇宙の法則でありますのに、現世には吾人の理想に應ふための實物が在りません。是事が來世の存在の最も確かなる證據ではありませんか。(問答)

それ信仰は望む所を疑はずいまだ見ざる所を憑據とするものなり。(ヘブル書十一章一節)

信仰は人によつては迷信の如くに見える。信仰は確かに一種の冒險である。之に従つて或は失敗に終る乎も知れない。乍然、信する者は信仰の迷信でない事を知る。信仰は心に響く神の聲に對する信者の應諾である。彼は形體を見ない、又證明を有たない、乍然、彼は確かに信するのである。然り、信せしめらるゝのである。彼に取りては信仰其物が見ざる所の物の證據となるのである。彼は言ふのである、我に信仰起れり、故に之に應ずるの實物なかるべからずと。實物を以て信仰を證明するのではない、信仰を以て實物を證明するのである。是が信仰の力である。此力なくして信仰は之を信仰と稱するに足りない。(研二)

イエス進みて彼等に語りいひけるは天のうち地の上のすべての權を我に賜れり、この故に汝等ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名にいて弟子とし、且わがすべて汝等に命ぜし言を守れと彼等に教へよ、それわれは世の末まで常に汝等と偕にあるなり アーメン。(マタイ傳二八章十八—二十節)

三位一體の教義は道德的教義であります。之を信するに由て人の人生觀は全く一變します。之を拒みます時に彼の品性の變化は始まります。基督教の凡ての教訓は此教義と大關係をもつてゐます。之を取ても捨てゝも可いと思ふ人は、未だ基督教を了解しない人であります。さうして基督教が世を救ふための實際的勢力であります以上は、三位の神を信せずして此勢力を維持することは出来ません。私は私の聖書に照して見まして、又私の理性に訴へて見まして、殊に又私の實際的生涯に應用して見まして、エホバの神は三位一體の神でなくてはならないことを信じて疑はないのであります。(問答)

なんぢら恵によりて救を得、これ信仰によりてなり、己によるにあらず神の賜なり。行によるにあらず、此の如くなるは誇る者なからん爲なり。われらは神の造り給へる者なり、即ち我等をして善事を行はしめん爲にキリストイエスの中に造り給へり、この事は神われらに行はんとてあらかじめ備へ給ひし所なり。(エペソ書二章八―十)

我にして自ら悔改むるにあざれば神は我を救ふ能はずとは、偽預言者と偽牧師の屢々我等に告げし所なり。然り我は悔改めざれば救はれざるべし、然れども神は聖靈を以て我を悔改めしめ給ふ。我れ躬から意志の努力を以て悔改めしに非ず、是れ到底我の爲し得ざる業なり。然れども神我に宿り我意志を以て彼の意志をなし、而して彼の意志の能力を以て我をして悔改めしめ給ふ。我れ獨力を以て悔改めしに非ず、然かも神は之を我が悔改として受け納れ給ふ。嗚呼、神祕中の神祕とは神と意志との神祕なり。然かも贖罪の神祕は此の神祕の中に存す。我等は哲學的に之を説明し能はざらん、而かも最も確實なる事實として我等は此の事を知るなり。そは我等の意志に關する事實は最も確實に知り得ればなり。(所感)

その怒はたゞしばしにて、その恵は生命とともにながし、夜はよもすがら泣き悲しむとも朝には歡びうたはん。(詩篇三十篇五節)

エホバは怒り給はざるにあらず、我等に刑罰の臨まざるにあらず。然れども是れたゞ暫時のみ。彼の恩恵は延びて終生に渉るなり。懲罰は例外なり、而して恩恵は常則なり。涙は時に浮ばざるにあらず、然れども是れ單に旅人の一夜を我家に過すが如し。朝來れば彼は去り、而して歡喜は彼に代りて永へに我と共に住むなり。苦痛は暫時のみ、歡喜は永久なり。涙は旅人の如くにして去り、感謝は家人の如くにして來り住む。然り、歡喜は朝と共に來らん。旭陽暗黒を排して昇る時に、我が唇に讚美の聲揚る。(舊約)

その靈魂は墓に近より、その生命は滅す者に近づく。しかる時にもし彼とともに一箇の使者あり、千の中の一箇にして中保となり、正しき道を人に示さば、神かれを憫れみて言たまはん、彼を救ひて墓にくだること無らしめよ、我すでに收贖の物を得たりと。

(ヨブ記三三章二二―二四節)

人類は神から墮落したのであります。彼が「天の所」(エペソ書一章三節)に於て神の側に於て神と偕に有つべき位地から墮落したのであります。彼に臨みし凡ての悲痛は、此墮落に原因して居るのであります。罪の中の罪とは神を捨て去ることであります。随つて救済の何であるか、判りませう。救済は先づ第一に人を神に連れ還ることです。さうしてキリストの十字架は、神と人との間に立ちて此獨特の用をなすものであります。キリストは道德を説いて僅かに人心の改善を計り給ひませんでした。彼は罪其物を滅し給ひました。即ちキリストに依て神と人との間に在りし離隔は取去られました。(問答)

視よわがしもべ智慧をもておこなはん、上りのほりて甚だたかくならん。曩にはおほくの人かれを見ておどろきたり(その面貌はそこなはれて人と異なり、その形容はおとろへて人の子とことなれり)。後には彼おほくの國民にそゝが、王たち彼によりて口を緘まん。そはかれら未だつたへられざることを見、いまだ聞かざることを悟るべければなり。

(イザヤ書五二章十三―十五節)

復活はまことに大なる奇蹟である。然し乍ら、品性の純聖は更に大なる奇蹟である。而して此奇蹟があつて、彼奇蹟は奇蹟ではないのである。イエスの在りし事が既に奇蹟中の最大奇蹟である。道德の法廷に於て一點の指す所のなき人の在りし事、其事が最大の奇蹟である。而して復活は此人に在つた事である。之を自然の結果と見て誤らないのである。イエスは人であつて人でないのである。而して内が外に現はれんがために、體が靈に應はんがために、彼の場合に於ては、生は死に勝ちて、彼は死してより高き形状に於て復活したのである。(復活)



神と稱ふる者、或は天に在り、或は地にありて、多くの神多くの主あるが如しと雖も、我らに於ては唯一つの神即ち父あるのみ、萬物之より生り、我らも之に歸す。

(コリント前書八章五、六節)

天地は廣し、人は多し、然れども其の中に唯二人あるのみ。神と我と是なり。彼我を愛し、我又彼を愛し、我は彼の命に聽いて凡ての事を爲す。我は彼に譽められて喜び、責められて泣く。彼に善とせられん事は我が終生の目的なり。我彼と共に働き、彼と榮光と恥辱とを頌つ。彼、崇めらるれば我歡び、彼、瀆さるれば我怒る。我れ彼に我手を引かれて彼の造り給ひし宇宙を逍遙し、其中の諸の獸と天空の諸の鳥とを示され、我が生物に名づける所は皆其名となる。我はまことに今の世にありて始のアダムなり。我の外に人あるなし。唯神、我と偕にあるのみ。神と我とのみ。故に我は彼に在りて萬人と萬物とを愛す。我は神に由らずして何物にも繋がらず。亦神に由りてすべての者に繋るなり。(感想)

されど今キリスト死より甦りて寢りたる者の復生のはじめとなれり。それ人によりて死ぬることいで人によりて甦ること出でたり。アダムに屬る衆の人の死ぬる如くキリストに屬る衆の人は生くべし。(コリント前書十五章二十一、二二節)

信者が復活するのではない、彼の裏に住みたまふイエスが復活するのである。彼は義によりて生き給ふのである。而してイエスは信者の裏に在りて復活し給うて、信者と共に復活し給ふのである。信者はイエスの復活の同伴に與かるのである。彼と共に擧げらるるのである。「我れ生くれば汝等も生くべし」と彼が言ひ給ひしは此事である(ヨハネ傳十四章十九節)。斯くて信者の復活に敢て不思議なる所はないのである。イエスの復活が當然であり自然であるが如くに、信者の復活も亦當然であり又自然であるのである。(復活)

われ主エホバの大能の事跡をたづさへゆかん、われは只なんぢの義のみをかたらん。神よなんぢわれを幼少より教へたまへり。われ今にいたるまで汝のくしき事跡をのべ傳へたり。神よねがはくはわれ老いて頭髮しろくなるとも、我がなんぢの力を次代にのべ傳へ、なんぢの大能を世に生れいづるすべての者に宣傳ふるまで我をはなれ給ふなかれ。

(詩篇七一篇十六―十八節)

千九百年前の往昔に在りて基督教の一切は槽中の嬰兒に存せり。其時未だダンの神曲あるなく、クロムウエルの英國あるなし。之を守るに唯マリヤの織手とヨセフの堅忍とありしのみ。而かも神の植る給ひし木は成育ちてレバノンの香柏よりも高きに至れり。我等今の時に方り其一枝を此地に植ゑんと欲して何をか懼れん。今や全宇宙の我等の業を援くるあり、亦幾萬の聖徒の我等の言を證するあり。我等にして若し此小暗塊を酵化し得ずんば、後世は我等を評して何と言はん。(所感)

山はうつり岡は動くともわが仁慈はなんぢより移らず、平安をあたふるわが契約はうごくことなからんと、此はなんぢを憐みたまふエホバのみことばなり。

(イザヤ書五四章十節)

靈魂の要求するものは愛であります。純潔無私の愛であります。また宏大無邊の愛であります。靈魂は實に莫大なる要求を爲すものであります。彼は到底金殿玉樓位を以ては満足致しません。美衣美食位で彼の飢渴は決して癒さるゝものではありません。彼に侍せしむるに三千の宮女を以てしても、徒に彼の悲哀を増す計りであります。幸福なるホームを以てしても、善良なる友人を以てしても、是も亦彼の満腔の欲望を充たすには足りません。靈魂は實に其友として、また其父として、其救主として宇宙萬物の造主たる獨一無二の活ける眞の神の愛を要求致します。之れなければ彼は死んだものです。之あれば彼の欲する凡てのものを獲たのであります。(座談)

この故に汝等の大なる報を受くべき信仰を投棄すること勿れ。なんぢら必ず用ゆべきものは忍耐なり、これ神の旨を行ひて約束のものを受けんが故なり。今しばらくありて来る者きたらん、必ず遅からじ。義人は信仰によりて生くべし、若し退かば我が靈魂これを喜びとせじ。されど我等退きて沈淪に及ぶべきものにあらず、信じて靈魂の救を得べきものなり。(ヘブル書十章三五―三九節)

信仰とは信すべからざることを信するにあらざるなり。二と二を合すれば五なりとは、宇宙が消え失するとも我は信する能はざるなり。虚言を吐くは善なりとは、水火の責めに遇ふとも我は信する能はざるなり、而して信すべからざるなり。虚喝手段を以て人を善道に導き得べしとは、如何なる證明ありと雖も我は信せざるなり。信仰とは信すべきことを、懼れず、躊躇せず信するを云ふなり。(求安)

われ乏によりてこれをいふにあらず、そはわれいかなる状に居るもそれを以て足れりとする事を學べばなり。われ貧賤に居るの道を知りまた富厚に居るの道をしり、飽くことも飢ることも、豊むことも歎くこともすべての事に於て我これを熟練せり。我は我に力を予るキリストによりて諸の事を爲し得るなり。(ピリピ書四章十一―十三節)

キリストが我が心の中に寓り給うて、感謝が我が生命となる時に、我の爲し得ない善とては一つも無くなる。我は其時如何なる敵の如何なる怨をも自由に赦す事が出来る。如何なる辛苦にも堪ふことが出来る。如何なる犠牲をも拂ふことが出来る。其時我は善の勇者であり、愛の富者であつて、穢れたる我身が到る處に香氣を放つやうに感ずる。若し是れが救済でなく、復活でなく、昇天でないならば、我は救済、復活、昇天の何である乎を知らない。其時我は詩人の言を藉りて歌ふ、

神は我が足を塵の足の如くし、  
我を我が高處にたゝせたまふ (詩十八篇三三節) (所感)

それは父の死し者を甦らせて生しむるが如く子も己の意に従ひて人を生しむべし。それ父は誰をも鞠す審判は凡て子に委ねたり。(ヨハネ傳五章二一、二二節)

神がキリストを以て我等を鞠き給ふに至つて、審判は我等が想ひしが如く怖るべき者でなくなつたのである。審判と聞けば甚だ恐ろしく感ずるなれども、キリストが審判き給ふと聞いて、恐怖は去りて感謝が來るのである。キリストは誰ぞ、神と人との間に立つ一位の中保者、人を神に執成し給ふ者、人の罪の輕減と赦免とを希ふ者、柔和なる救主、罪人の友……神はキリストに審判を委ね給うて罪の輕減と赦免とを期し給うたのである。茲に於てか我等は多くの罪を犯しゝに拘はらず、我等に無罪放免の希望が提供されたのである。我等は今はい等を鞠く者の何人であるかを知るが故に、臆せずして彼の臺前に立つことが出来るのである。

(復活)

また救の胃および聖靈の劍すなはち神の道を取り、恒に各様の禱告と祈求を以て靈によりて求め、かつ諸の聖徒の爲にも慎しみてこの事をなし、祈りて倦ざるべし。

(エペソ書六章十七、十八節)

キリストに於ける信仰は余を罪より救ふものなり。然れども信仰も亦神の賜物なり(エペソ書二章八節)。余は信じて救はるゝのみならず、亦信せしめられて救はるゝ者なり。此に於てか余は全く自身を救ふの力なきものなるを悟れり。然らば余は何をなさんか。余は余の信仰をも神より求むるのみ。基督信徒は絶間なく祈るべきなり。然り彼の生命は祈禱なり。彼尙不完全なれば祈るべきなり。彼尙ほ信仰足らざれば祈るべきなり。彼れ能く祈り能はざれば祈るべきなり。惠まるゝも祈るべし、呪はるゝも祈るべし。天の高きに上げらるゝも、陰府の低きに下げらるゝも我は祈らむ。力なき我、わが能ふことは祈ることのみ。(求安)

兄弟よ汝等が中に不信仰なる悪き心を懷きて活神の前より離れ墮ることなからんやう慎しむべし。汝等のうち誰一人罪の誘惑によりて剛愎にならざるやう今日と稱ふるうちに日々互に相勧めよ。(ヘブル書三章十二、十三節)

ナザレのイエスよ、余は汝に此試誘と勝利ありしが故に汝に感謝す。余は之に由て汝の余の如く試みられし者なるを知る。汝は總ての事に就て余の如く誘はれたり。故に汝は能く余の荏弱を體恤り給ふなり(希伯來書四章十五節)。汝自ら悪魔と戦ひ給ひて能く其の威力の強大なるを知り給ふ。我等幾回か彼の欺く所となり、方略を講じ、聲望を求め、汝に事へんと欲して却て屢々彼に拜跪せり。願はくは汝の智慧を今我等に賜ひ、我等も汝に倣ひて能く神の聲と悪魔のそれとを區別するを得、瞭かなる眼を以て汝の正道を踐み(馬太傳六章廿二節)、右にも左にも曲ることなく、汝に依て總ての誘惑に勝ち、此所に汝の天國の建設を賛助け、彼所に汝の榮光に與からん事を、アーメン。(感想)

而してヤコブ一人遣りしが人ありて夜の明るまで之と角力す。其人己のヤコブに勝ざるを見てヤコブの髀の樞骨に觸れしかば、ヤコブの髀の樞骨そのひとと角力するとき挫離たり。(創世記三二章二四、二五節)

嬉しき時は神に我が罪を指示された時である。ペニエルに於けるヤコブの如く天使に傲慢の髀の樞骨の巨筋を絶たれて歩行き得ぬに至る時である。又ダビデが神より預言者ナタンを遣はされて其の罪を糺され、汝は其人なりと言はれし時の如きときである。其時は我は人と自己とを離れて神に絶る。其時十字架は我が眼の前に輝く、其時我に懷疑は一つもなくなる。自己が罪人の首であることを感じた時に、キリストイエス罪人を救はん爲めに世に臨れりとは信すべく又疑はずして受くべき話である。而して神に我が傷(罪)を指されずして此の感は起らない。我は義人なりと思ふ時に、我れ他人の罪を責めつゝある間は、此の嬉しき美はしき感は起らない。一言の申譯なくして我れが神の前に立つ時に、キリストは其十字架を負ひ給ひて我が心の眼の前に顯はれ給ふ。(感想)

されば誰も人に誇る勿れ、萬物は汝等の物なり。或はパウロ或はアポロ或はケバ、或は世界あるひは生あるひは死、あるひは今のもの或は後のもの、是れみな汝等の屬なり。汝等はキリストの屬、キリストは神の屬なり。(コリント前書三章二一—二三節)

基督教が解つて見ますと世人の生涯は夢の生涯であります。物でないものを物と解し、地獄に落行くのを天堂に昇行くのであると解する底の生涯であります。曰く戦争、曰く外交と。キリストの心を以て之を見ますれば、是れ小の小なる問題であります。若し人、全世界を得ることも其靈魂を失はゞ何の益あらん乎。露西亞の天子が其欲ふ通りに亞細亞大陸の全部を得た所が、爆裂彈一發で永遠の死に往かねばならないと思へば、滿洲問題の如き、彼に取りては極小の問題でなくてはなりません。取つた所が僅かに五千二百二十五萬平方哩に過ぎない此地球、無窮の宇宙に永在することの出来る權利を授けられたる人は、斯かる小なるものゝために彼の全力を注がんとは致しません。(感想)

心の貧しき者は福なり、天國は即ち其の人の有なればなり。(マタイ傳五章三節)

天國の富者たらんと欲する者は地上に赤貧者たらざるべからず。而して貧の極は身の貧にあらずして、心靈の貧である。赤貧洗ふが如しと言ふ者も時には俯仰天地に耻ぢずと言ふ。斯く言ふ者は、身は貧すれども心靈は甚だ富める者である。貧に内なる外なるとがある。心靈の貧者は内に何物をも有たない者である。その實例は使徒パウロである。彼は心靈の貧しき者であつた。誇るべきの智慧なく、倚るべきの徳なく、彼の自白せる如く「彼は罪人の首」であつた。而して神の前に立ちて謙虛の底にまで引下げられし彼は、キリストに在りて其の諸徳を認むるを得て榮光の天にまで引上げられたのである。(研二)

そは神は預じめ知りたまふ所の者を其の子の状に效せんと預じめこれを定む、こは其の子を多くの兄弟のうちに嫡子たらせんが爲なり。またあらかじめ定めたる所の者はこれを召き、召きたる者はこれを義とし、義としたる者はこれに榮を賜へり。

(ロマ書八章二九、三十節)

人は何人も自ら望んで天國の市民たる能はず、血肉は神の國を嗣ぐこと能はず、人の智も才も富も位も、彼を神の子となすに足らず、たゞ神の簡び給ひし者のみ主を其榮光に於て見るを得べし。天國の建設は神の事業なり、人の之に關與するは當に其の勞役者たるに止まる。其計劃、其進行、其完成は總べて神の聖旨に従ふ。神には神の意志在て存す、人は之を變更し、又は伸縮する能はず。神の召し給ひし者のみが其子と稱せらるゝを得るなり。彼の召を蒙ることなくして、智慧ある者も、能ある者も、貴き者も、天國の市民たること能はず。(感想)

キリスト既に我等の爲に詛はるゝ者となりて我等を贖ひ律法の詛より脱しめ給へり、蓋すべて木に懸る者は詛はれし者なりと録されたればなり。(ガラテヤ書三章十三節)

キリストの肉體上の苦痛は、彼の心靈上の苦痛を表はせしのみ。赦罪の恩惠は彼の神經上の疼痛によりて來るにあらずして、心靈上の憂愁によりて來るなり。カルバリ山にあらずして、ゲツセマネの園こそ人類の罪の贖はれし所なれ。キリストに棘の冕を被らしめしものは我が罪なり。彼に苦き盃を飲ましめしものは我の罪なり。彼を十字架に釘うたしめしものは我の罪なり。天主教徒が常に十字架を身に纏ひてキリストを思ひ、誠實なる新教徒某が常に十字架上のイエスの像を机上に置き、汝の罪がキリストに此苦痛を與へたり」と獨語して己の罪を責めたりとは、迷信邪説として悉く排すべからざるなり。(求安)

エホバは汝がすべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし、なんぢの生命をほろびより  
 贈ひいだし、仁慈と憐憫とを汝に被ぶらせ、なんぢの口を嘉物にてあかしめ給ふ。斯くて  
 なんぢは壯やきて驚のごとく新になるなり。(詩篇百三篇三—五節)

誠實なる汝の神は宇宙の主宰者にして無限の愛なるを知れ。此神に對する汝の  
 位置は君に對する臣の位置にあらずして、慈母に對する赤子の位置なるを記憶せ  
 よ。我等は神より萬を受けて一を返上する能はず、我等の誠實其物さへも神の賜  
 物なるを如何せん。我等の財をも身をも靈をも神に獻ぐるとも、神は只神のもの  
 を受けしのみ。神は與ふるものにして、我は受くるものなり。神は恵むものにし  
 て、我は恵まるゝものなり。神は愛するものにして、我は愛せらるゝものなり。  
 無限の愛は愛せんことを要して、愛せらるゝことを要せず。神を愛せんと欲する  
 ものは、神に愛せられざるべからず。(求安)

汝等のうち父なる者誰か其の子のパンを求めんに石を予んや、魚を求めんにそれに代て蛇を  
 予へんや。卵を求めんに蠍を予んや。されば汝等惡者ながら善き賜をそのこどもに予ふるを  
 知る、まして天に在す汝等の父は求むる者に聖靈を予へざらん乎。

(ルカ傳十一章十一—十三節)

天才は慕ふべし、然れども聖靈の至美たるに如かず。天才は一時賜金の如し、  
 吾人之を消盡するの危険あり。聖靈は終身恩給の如し、汝の能力は汝が需むる所  
 に循はんど。天才は少數者にのみ與へられ、聖靈は何人も之を受くるを得べし。  
 天才は神を否む者にも與へられ、聖靈は父の愛に沐浴してのみ之を享くるを得べ  
 し。天才は貴族的なり、聖靈は平民的なり。我儕は心を卑うして、萬民と共に天  
 の此恩賜に與からんと欲す。(所感)



若キリスト汝等に在ば體は罪に緣りて死に靈魂は義に緣りて生きん。若イエスを死より甦らしゝ者の體なんぢらに住まば、キリストを死より甦らしゝ者は其なんぢらに住むところの靈を以て汝等が死ぬべき身體をも生すべし。(ロマ書八章十、十一節)

イエスの宿り給ふ信者と雖も、其肉體は性來の罪の故に死する者である。然れどもイエスは信者に宿り給ふに方て其靈魂に宿り給ふが故に、靈魂はイエスの義の故に生く。自己の罪の故に肉體は死し、イエスの義の故に靈魂は生く。信者にありては、復活は彼の靈魂を以て始まるのである。然れども信者の復活は彼の靈魂を以て止まる者ではない。イエスの靈の宿るところとなりて、復活は靈魂より更に肉體に及ぶのである。人は靈魂のみではない、又肉體のみではない、靈魂と肉體とである。靈肉は彼の實在の兩方面である。故に靈魂に始まりし復活は肉體にまで及ばざるを得ないのである。(復活)

凡て父の我に賜へし者をわれ一つをも失はず末日にこれを甦らすは即ち我を遣しゝ父の意なり。おほよそ子を見てこれを信する者は永生を得、われまたこれを末の日に甦らすべし、これ我を遣しゝ者の意なればなり。(ヨハネ傳六章三九、四十節)

「主は即ちかの靈なり」とある(哥林多後書三章十七節)。主キリストは特別の靈である。「人の衷には靈魂のあるあり」と云ふこの靈ではない、新生命の根源なる其靈である。靈體の精たる其靈である。「神の種其衷に在り」とある新生命の胚珠である(ヨハネ第一書三章九節)。此種が人の衷に宿りて、茲に靈體の發育が始まり、終に復活昇天の道程を経て永生状態に入るのである。主が「我は復活なり生命(永生)なり」と言ひ給ひしは、此事を言ひ給うたのである(ヨハネ傳十一章廿五節)。信者の復活はイエスを離れてあるのではない。復活はイエスに於て在るのであつて、彼に於てのみ在るのである。(復活)

義ことの爲に責めらるゝ者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり。我がために人な  
 んぢらを誦誦また迫害いつはりて各様の悪言をいはん。其時は汝等福なり、喜び樂しめ、  
 天に於て汝等の報賞おほければなり。そは汝等より前の預言者をも如此せめたりき。

(マタイ傳五章十一十二節)

キリスト曰く、凡て汝等を殺す者自ら神に事ふると意ふ時至らんと(約翰傳十

六章十二節)。彼等が我等を責むるは吾等を悪人と信じてなり。故に彼等の迫害に  
 大いに吾等の同情を寄すべきものあり。彼等は正義のために我等を殺さんとする  
 なり。社會のために、人道のために、然り或場合に於ては我等の信奉する基督教  
 のために吾等の生命を奪はんとするなり。故に彼等の憤怒に一片の誠實の愛すべ  
 きあり。吾等は彼等のために祈り、彼等を憎むべからざるなり。(感想)

誠に實に汝等に告げん、一粒の麥もし地に落ちて死なずば唯一つにて存らん。若し死なば  
 多くの實を結ぶべし。(ヨハネ傳十二章二四節)

死は死ではない、新生である。死を以て新生命は始まるのである。肉にありて  
 障礙なき靈的生命なる者はない。「肉は靈に逆らひ靈は肉に逆らふ、此二つのもの  
 互に相敵る」と言ふ(ガラテヤ書五章十七節)。靈が完全に靈的ならんと欲せば、  
 その敵なる肉の消滅を期せざるを得ない。而して死は靈の障害を除いて茲に其自  
 由の發達を遂げしむるのである。肉を離れて靈は自から成長し、其活動を旺にす  
 る。靈は肉に宿りて一人の靈である、然れども肉を離れて多くの靈と共にあるこ  
 とが出来り。「我れもし地より擧げられなば萬民を引ききて我に就らせん」とイエス  
 が言ひたまひしは此事である(ヨハネ傳十二章三二節)。イエスと雖も肉を離れて  
 地より擧げらるゝまでは、萬民を引ききて自己に化することが出来なかつたのであ  
 る。(復活)

イエス彼等に曰けるは汝等信なきが故なり、我まことに汝等に告げん、もし芥種の如き信  
あらば此山に此處より彼處に移れと命とも必ず移らん、また汝等に能はざることなかるべ  
し。(マタイ傳十七章二十節)

信とは此場合に於ては靈の能力であります。これは人が萬物の靈長として神よ  
り授かるの特権を與へられたものでありまして、此能力を以てして彼が自然界の  
上に施さんと欲して施し得ざる事はないこのことでもあります。然るに人類は神を  
離るゝと同時に、此能力を失つたのであります。彼は今は天然を支配するもので  
はなくして、その束縛の中に苦むものであります。さうしてキリストの降世の一  
つの大なる目的は、人類に此最初の特権を再び附與せんがためであります。即ち  
キリスト御自身が常に天然の上に超越して其束縛を受けられなかつたやうに、我  
等彼を信じ彼を愛する者にも亦此同じ能力を與へんがためであります。(問答)

エホバに依頼むは人にたよるよりも勝りてよし。エホバによりたのむはもろくの候にた  
よるよりも勝りてよし。(詩百十八篇八、九節)

頼るべきは神なり、人に非ず。彼に依頼むは侯爵伯爵に依頼むよりも遙かに  
好し。人に依りて失望絶えず、侯伯に頼みて耻辱多し。彼等は憎愛常ならず、褒  
貶時に循て變ず。エホバは然らず、彼は永遠に變らざる磐なり。彼は衰ふる時  
の匿所なり。死する時の支柱なり。彼に依頼みて暗黒は愈々光を放ち、衰落は益  
々慰藉を加ふ。彼に依頼みて耻辱あることなし。旭日の愈々光輝を増して晝の正  
午に至るが如く、彼に依頼みて我等の生涯は歳の愈々邁むに循て榮光を増して天  
の福祉に近づくなり。富貴も名譽も、位階も勳章も何の慰藉を我等に供せざる時  
に、エホバは其聖顔を我らに向け給ひて、我らの寂寞を癒し給ふ。(舊約)

イエスキリストは昨日も今日も永遠變らざるなり。さまざまなる教と異なる教に揺蕩さる事勿れ。(ヘブル書十三章八、九節)

我れ史を繕きて、國は興きて又亡び、民は盛えて又衰ふるを讀む。唯見る一物の時代の敗壞の中に在て巍然として天に向つて聳ゆるあるを。キリストの十字架是れなり。世は移り人は變るとも、十字架は其光輝を放ちて止まず。萬物悉く零碎に歸する時に是れのみは惟り残りて世を照らさん。十字架は歴史の中樞なり。人生の依て立つ磐石なり。之に依るにあらざれば鞏固なることあるなし、永生あるなし。十字架を除いて他は皆な悉く蟬蛸なり。キリストのみが窮りなく存つ者なり。(感想)

ヤハよ主よなんぢ若もろくの不義に目をとめ給はゞ誰かよく立つことを得んや。されどなんぢに赦あれば人におそれかしこまれ給ふべし。われエホバを俟望む、わが靈魂はまことのぞむ。我はその聖言によりて望をいだく。わが靈魂は衛士があしたを待つにまさり、誠に衛士が且をまつにまさりて主をまてり。(詩百二十篇三一六節)

我が衷を省みて渠處に何んの善きものはない。其處にあるものは汚穢、惡念、邪慾、貪婪のみである。若し我れ自から之を取拂ふにあらざれば、我は神に近づく能はずとなれば、我は到底神に近づく事の出来ない者である。然しながら神は我が罪よりも大である。彼は我の罪あるに關はらず我を救ひ給ふ。即ち彼は我がために我が罪を殺して我を彼の屬となし給ふ。我の救拯の希望は單に神の恩恵に存してゐる。彼にして我を恵み給ふにあらざれば我の救はるゝ希望は一つもない。(所感)

われら四方より患難を受くれども窮せず、詮かた盡れども望を失はず、迫害るれども乗られず、跌倒るれども亡びず、われら何處へ往にも常にイエスの死を身に負へり、こはイエスの生ることを我等の身に顯れしむるなり。(コリント後書四章八―十節)

神の爲めに爲さんと欲せば、先づ自己に死せざるべからず。黨派心なり、愛國心なり、未だ自己の其中に混合するあり。自己に死して後、我は初めて神に於て生く。神に生きて我に恐怖なし。恐怖去つて我に明通あり。神の爲めにする傳道に憂慮、政略、方法(自然の常道を除いて)の我の事業を混亂せしむるなし。世界は我に化すべきものにして、我は世界に屈服投合すべきものにあらず。世は同音一齊に彼方に立つとも、我は斷々乎として獨り此方に立つべし。我に松柏の霜雪に凋まざるあり。我に大嶽の儼として動かざるあり。我の在在は萬人を利し、我の一聲は波濤を鎮む。神の爲めにするありて、傳道は初めて世を益するに至る。

(傳道)

それ十字架の教は沈淪者には愚なるもの、我等救るゝ者には神の能たるなり。

(コリント前書一章十八節)

如何にして我が靈魂を救はんか——此の號叫の聲がなくしては到底基督教は解るものではありません。基督教は或人が謂ふ佛教のやうな哲學の一種では御座いません。又禪宗のやうな膽力鍛錬の爲の工夫でもありません。基督教とは靈魂を救はん爲めの神の全能であります。キリストの降臨と云ひ、十字架上の罪の贖と云ひ、皆要するに靈魂を救はんが爲めの神の行爲でありますれば、是等の出來事を靈魂以外の事柄に當て箴めては、其眞義は少しも解らないので御座います。

(座談)

エホバの使手にもてる杖の末端を出して肉と無酵パンに觸れたりしかば、嚴より火燃え  
 あがり肉と無酵パンを焼き盡せり。かくてエホバの使去りてその目に見えずなりぬ。ギデ  
 オン是において彼がエホバの使者なりしを覺り、ギデオンのひけるはあゝ神エホバよ我れ  
 我面を合せてエホバの使者を見れば將如何せん。(士師記六章二一—二二節)

然れどもギデオンは恐るゝに及ばず、彼は死せざるべし。エホバは彼を殺さん  
 として彼に顯はれ給ひしにあらず。彼を救ひ、彼を以て彼の家と國とを救はんと  
 めに彼に顯はれ給ひしなり。神は又神として彼に顯はれ給はず、エホバとして顯  
 はれ給へり。エホバは神なり。然れども宇宙の主權者としての神にあらず、人類  
 の救主としての神なり。彼は萬有を主宰し給ふ。彼の手には權勢と能力あり。然  
 れども彼れ人を救はんとして世に臨りたまふや、彼は身に謙遜を衣、人の如き形  
 狀にて現はれ給へり。エホバは人の見るを得る神なり。先きにモーセに顯はれ、  
 エホバなる名を彼に示し給ひ、後にイエスキリストとして世に顯はれ、萬人の罪  
 を贖ひ給ひし者なり。(舊約)

なんぢその訓諭をもて我をみちびき後またわれをうけて榮光のうちに入れ給はん。汝のほ  
 かには我たれをか天にもたん、地にはなんぢの他にわが慕ふものなし。わが身とわが心とは  
 おとろふ、されど神はわが心の磐石が永への嗣業なり。(詩篇七三篇二四—二六節)

元來靈魂と肉體とは一のものでありまして、二者は容易に相離るべきものでは  
 ありません。然るに罪惡の結果として、人たるものは一度は靈肉其處を異にせね  
 ばならぬ悲運に陥りました。是れ實に世の罪人が死刑に處せらるゝと同然であり  
 まして實に悲しむべきの至りで御座います。私共が啻に死を忌むのみならず亦之  
 を非常に怕れまするのは、即ち私人類たるものは罪の罰として死刑に處せらる  
 るを知るからであります。死の觀念に非常の悲惨の情の附隨して居るのは、全く  
 之が爲めであると思ひます。あゝ人誰か死を怖れざらんやです。また人誰か復活  
 を望まざらんやです。罪の結果として一度は死に遇はねばならぬならば、罪の赦  
 しの結果として新しき體の與へられん事は、人の心の奥底に潜んで居る至當の祈  
 願では御座いませんか。(座談)

死し人の甦るも亦かくの如し。壞つる者にて播れ壞ちざる者に甦され、尊からざる者にて播れ榮ある者に甦され、弱き者にて播れ強き者に甦され、血氣の體にて播れ靈の體に甦さるゝなり。血氣の體あり靈の體あり。(コリント前書十五章四二―四四節)

復活を迷信と云ふのは祈禱を迷信と云ふのと同じで、畢竟その何たるを解しないからであります。基督教の教ふる復活なるものは、此肉體が肉體のまゝで甦ると申すのでは御座いません。復活の眞意は更生でありまして、生命が更に肉體に加へらるゝ事でありませぬ。我等は死して復び此世に歸らん事を望む者では御座いません。我等は死して更に新しき生命を興へられ新しき世界に往かうと願ふのであります。(座談)

汝等は地の鹽なり、鹽もし其の味を失はば何を以てか故の味に復さん、後は用なし、外に棄られて人に踐るゝのみ。(マタイ傳五章十三節)

地の生命は甚だ腐れ易くある。その新鮮なる時期は短く、その潑刺たる期間は少時である。地上の生命は忽焉にして腐敗し、暫時にして硬化す。茲に於てか鹽の必要があるのである。既存の善事を保存し、其美を發揚し、之をして更に地の涵養を助けしむる或者の必要があるのである。而して神の生命の言を心靈に受けし信者が、地の此必要に應ずるのであるとの事である。信者によりて福音以外の諸徳、信者以外の諸善が保存せられ、發揮せられ、流布せらるゝとの事である。而して此事は世に隠れなき事實である。キリストの福音によりて、舊道徳と舊信仰とは、眞正の意味に於ての復活を見たのである。(研二)

われ今祭物とならんとす、我が世をさる期ちかづけり。われ既に善戦をたゝかひ、既に馳るべき途程を盡し、既に信仰の道を守れり。今より後義の冕わが爲に備へあり。主すなはち正しき審判をなす者その日に至りて之を我に予ふ。獨われに予ふるのみならず凡て彼の顯著を慕ふ者にも予ふべし。(テモテ後書四章六―八節)

信者は神の僕である。主人より特殊の要務を委ねられたる者である。故に彼は此要務を果すまでは死すべきでない、而して彼は其時までは決して死なないのである。リビングストンの言ひし「我等は天職を終るまでは不滅なるが如し」との言は信者の確信である。彼に猶ほ天職の完成せざるものがあれば、彼は死なないのである。然れども彼が若し既に果すべきの事を果し了りしならば彼は死ぬるのである。彼は長壽の祈求を以て神に迫りてはならない。既に用なき者は此世に存へるの必要はないのである。「何ぞ徒らに地を塞がんや」である(ルカ傳十三章十節)。僕は主人の用を果せばそれで去つて可いのである。彼は心に言ふべきである、我は長く生きんことを欲せず、我は唯我主の用を爲さんと欲すと。(復活)

イエス行とき生來なる替を見しが、その弟子かれに問て曰けるはラビ此人の替に生れしは誰の罪なるや己に由るか又二親によるか。イエス答へけるは此人の罪にあらずまたその二親の罪にもあらず彼によりて神の作爲の顯れんためなり。(ヨハネ傳九章一―三節)

茲に災禍が全然恩恵の立場より解釋されたのである。盲目と云へば何れの國に於ても特別の天罰として認めらるゝに關はらず、イエスは茲に斷然と盲目は天罰にあらず恩恵の顯はるゝための機會なりと云ひ給うたのである。實に大膽なる言にして斯くの如きは無い。是は神の子を待たずしては言ふ事は出来ないことである。イエスの此言に由て災禍に對する人類の思考は一變したのである。然り一變すべきである。災禍ではない、天罰ではない、神の悲怒の表現ではない、其反對である。災禍は神の行爲の顯はれんがための機會である。故にもし人が之を其目的を以て用ひるならば恩恵である。身の艱難は凡て神の我等に降し給ふ恩恵である、これイエスが特別に人に傳へ給ひし大福音であつて、基督信者なる者はすべて此福音に循つて人生を解釋すべきである。(復活)



主よわれを憐みたまへ、われ終日なんぢによばふ、なんぢの僕のたましひをよるこぼせた  
まへ。主よわが靈魂はなんぢを仰ぎのぞむ。主よなんぢは恵ふかくまた赦をこのみたまふ。  
汝によばふ凡てのものを豊にあはれみたまふ。(詩篇八六篇三―五節)

未來に於て神の裁判はある、必然在る。然し愛の神は御自身人を鞠き給はずし  
て、審判は凡て之を子に委ね給うた。而して惠深くして赦を好み給ふキリストに  
鞠かれて、我らは最も恩惠的に鞠かるゝのである。而して御自身給恤を欲みて祭  
祀を欲み給はざるキリストは、人を鞠き給ふに當りて重きを其人の給恤に置き給  
ふのである。給恤はキリストが人を鞠き給ふ時の標準である。所謂正義と稱へて  
清淨潔白なる事ではない、或は信仰と稱へて教義と儀式と傳道の事に於て缺くる  
所なき事ではない。給恤である、憐愍である、救す心である、恵む質である、愛  
の行爲である。人の永遠の運命は之に由て決せらるゝのである。最後の裁判は愛  
の裁判である。愛せしか、愛せざりしか、これに由て限りなき刑罰か、限りなき  
生命かの別が定まるのである。(復活)

また凡の事は神の旨に依て召れたる神を愛する者の爲に 悉く働きて益をなすを我等は知  
れり。(ロマ書八章二八節)

復活を信じて宇宙と人生とを觀じて御覽なさい。宇宙とは何と麗はしい處と成  
るではありませんか。人生とは何と喜ばしいものに成るではありませんか。「我等  
悉く寝むるにはあらず、我等みな末の鐘の鳴らんとし忽ち瞬間に化せん。そは  
鐘鳴らん時死にし人甦へりて壞ちず、我等も亦化すべければなり」。此信仰があつ  
てこそ死は其の恐怖を脱り、世に怕い事、悲しい事はなくなつて仕舞ふのであり  
ます。冬が去つて春の來ますのも、鶯が、梅が枝に初春の曲を唱へますのも、  
花の晨も月の夕も、凡て皆一點悲惨の分子をも交へざる希望、快樂の基となりて、  
我等は天然の美を樂んで、其悲と慘とを思はざるに至るのであります。(座談)

イエス曰けるは誠に實に汝等に告ん若し人の肉を食はずその血を飲まざれば汝等に生命なし、わが肉を食ひわが血を飲者は永生あり、我末の日に之を甦らすべし。

(ヨハネ傳六章五三、五四節)

「我れ」——能力の充實せるイエスキリスト、天の中地の上のすべての權力を賜はれりと言ひ給ひし彼れ、世に在りし間に死者を甦へらすの實驗を有ち給ひし彼れ、其他種々の不思議なる行を爲し給ひし彼れ、又人類を向上せしむるに於て歴史上最大の力たりし彼れ、又我等彼れを信する者の心靈にありて何人も爲す能はざる道德的變化を成就たまひし彼れ、神の子、人類の王、我らの救者たる彼れ主イエスキリストが死者を甦らし給ふとのことである。ペテロとか、パウロとか、ヨハネとか云ふ人が此奇跡を行ふと云ふのではない。我は生命なり復活なりと云ひ給ひし神の子イエスキリストが此事を爲し給ふと云ふのである。何も不思議はないのである。(復活)

エノク六十五歳に及びてメトセラを生り、エノク、メトセラを生し後三百年神とともに歩み男子女子を生り。エノクの齡は都合三百六十五歳なりき。エノク神とともに歩みしが、神かれを取りたまひければ居らずなりき。(創世記五章二一—二四節)

「歩む」とは「静かに歩む」の意である。飛ぶにあらず、走るにあらず、歩むのである。雄飛と云ふが如き、疾走と云ふが如き、絶叫と云ふが如き事を爲さずして、忍耐を以て神に依頼み、其命に遵つて静かに日々の生涯を送る事である。敢て大仕事を成さんとせず、大傳道を試みんとせず、大奇蹟を行はんとせず、たゞ神の命維れ重んじ、彼の言維れ従ひ、神を信する是れ事業なりと信じて、無爲に類する生涯を送る事である。信仰の生涯の大部分は忍耐である、静肅である、待望である。神に在りて自己に足るの生涯である。又神より何物をも受くることなきも、彼れ御自身を賜はりしが故に、其他を要求せざる生涯である。(研二)

エホバ言給はく、なんぢら往昔のことを思ひいづるなかれ、また上古のことをかながふるなかれ、視よわれ新しき事をなさん、頓ておこるべし、なんぢら知らざるべけんや、われ荒野に道をまうけ、沙漠に河をつくらん。(イザヤ書四三章十八、十九節)

人の世に生るゝや、彼は新たに生る。彼は祖先の遺傳を受くること甚だ尠し。悪人の父より善人生れ、病弱の母より健兒生る。神は各人を以て新たに其聖業

を始め給ふ。祖先の悪しきは憂ふるを須ひず。人は各自アダムとエバの如く直に神に造らるゝ者なり。嬰兒が呱呱の聲を揚ぐる毎に革新の聲は揚る。希望は時々刻々此世に臨みつゝあり。腐敗の累積は敢て恐るゝに足らざるなり。(所感)

然ば主の來らんときまで時いまだ至らざる間は審判する勿れ。主は幽暗にある隠れたる情を照し心の計謀を顯さん、其時おのゝ神より譽を得べし。(コリント前書四章五節)

造化の不完全を憤り、信者に缺點多きを怒りて、神を誹り、信者を嘲り、福音を斥け又は之を棄つる者は、神の聖業を其中途に於て見て之を其完成に於て視んと欲せざる者である。救拯は既に始まつたのである。然れども救拯は既に了つたのではない、完成の途上に於てあるのである。而してその完成するや、目未だ見ず耳未だ聞かず人の心未だ念はざる者である(コリント前書二章九節)。然れば我等は俟つべきである。信者は己が完成せられんことを俟つべきである。不信者も亦神と福音と信者とに就て其最後の斷案を下さんと欲するに方つて、其時の到るまで俟つべきである。(研二)

キリストは醫者でもなければ又政治家でも御座いません。彼の天職は靈魂の救主たることでありまして、彼の爲されし仕事の性質から申しましても、彼は人類中に比類の無い者で御座いました。靈魂を救ふ者とは人の犯せし罪を赦し、其良心に満足を與へる者で御座います。かう云ふ人物は道徳家でもなければ、又哲學者でもありません。如何なる君子、碩徳鴻儒なりとも人の罪を贖うて之を赦す事は出来ません。靈魂の存在と其要求する物の何たるかを知れば、キリストの何人なるかを知るに難くないと思ひます。私共が靈魂を有する以上は、キリストの如き人物の降世と彼の爲されし事業とは、私共の生存上の大必要であると云はなければなりません。(座談)

この壊つる者は必ず壊ちざる者を衣、死ぬる者は必ず死なざる者を衣べし。このくつる者くちざる者を衣この死ぬる者死なざる者を衣るとき、聖書に録して死は勝に吞れんと有に應ふべし。(コリント前書十五章五三、五四節)

然り余は信ず、余の救主は死より復活し給ひしを。義人を殺して其人死せりと信せし猶太人の淺墓さよ。何ぞヒマラヤ山を敲きて山崩れしと信せざる。余が愛するものは死せざりしなり。自然は自己の造化を捨てず、神は己の造りしものを輕んずべけんや。彼の體は朽ちしならん、彼の死體を包みし麻の衣は土と化せしならん。然れども彼の心、彼の愛、彼の勇、彼の節——嗚呼若し是等も肉と共に消ゆるならば萬有は我等に誤謬を説き、聖人は世を欺きしなり。余は如何にして、如何なる體を以て、如何なる處に再び彼を見るやを知らず。唯

“Love does dream, Faith does trust  
Somehow, somewhere meet we must.”——Whittier.

愛の夢想を我れ疑はじ  
何様か何處かで相見んど。(ホイットチャー)

視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみてはや去りぬ。もろくの花は地にあらはれ、鳥のさへづ  
る時すでに至り、斑鳩の聲われらの地にきこゆ。無花果樹はその青き果を赤らめ、葡萄の  
樹は花さきてその馨しき香氣をはなつ。わが佳耦よ、わが美しき者よ、起ちて出できたれ。

(雅歌二章十一—十三節)

我が愛する者よ、我が美はしき者よ、我が希望よ、我が救主よ、起てよ、起て  
汝の墓より出で来れよ。見よ、恥辱の冬は既に過ぎ榮光の春は来りぬ。雨もやみ  
てはや去りぬ。憤怒、猜疑、嫉妬の寒風のはや汝の身に及ぶなし。鳥の囀る時  
はすでに至れり。斑鳩と雲雀と草雀との聲我等の野に聞ゆ。無花果樹はその芽を  
赤らめ、櫻花の爛熳たるも將さに近きにあらんとす、葡萄の樹は花咲きてその馨  
はしき香氣を放ち、春林到る處に綺羅を装はんとす。我が愛する者よ、我が美は  
しき者よ、我が希望よ、我が救主よ、起てよ、起て汝の墓より出で来れよ。愛を  
以て汝の敵に勝ち、恩恵を以て忿怒を癒し、野に春色の臨みしと同時に世に温  
情の春を來らしめよ。(所感)

眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時きたらん。今その時になれり。それ父は是の如く  
拜する者をもとめ給ふ。神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべきなり。

(ヨハネ傳四章二三、二四節)

神を信せずして神を知ること出来ぬ。初より神を疑つて掛つては神は永久  
に疑問物である。殊に神は至誠者であることを知つて、信仰の彼を知るために必要  
缺くべからざる者であることが能くわかる。至誠の人が何よりも嫌ふことは、人  
が彼に就て疑を挟むことである。至誠は至誠を要求する。至誠は至誠を以て接す  
るにあらざれば其中に存する秘密を授けない。至誠は懷疑に對しては絶對的沈黙  
を守り、固く其門戸を閉ぢて奥義の外に洩れざらんことを努む。懷疑の己に近づ  
くを見れば至誠は聲を勵まして曰ふ「ファイ、此處を去れ、我に汝に與ふべきも  
のなし」と。疑うて聖人を見れば聖人は愚人の如し。懷疑の眼に映する至誠は愚  
鈍であり、無情であり、無意義である。至誠の人に於て然うである。まして神に  
於てをやである。(研二)

視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す、人さきものを記念することなく之をその心におもひ出ることなし。然どなんぢらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ。視よわれはエルサレムを造りてよろこびとし、その民を快樂とす、われエルサレムを喜びわが民をたのしまん。而して泣聲とさけぶ聲とはふたゝびその中にきこえざるべし。

(イザヤ書六十五章十七—十九節)

我等に今復活の奇跡の行はれないのは、今は復活の時でないからである。又この朽つべき肉體の復活は永久の救済でないからである。神はより大なる復活を我等のために備へ給ふのである。彼が末の日に行ひ給ふ復活は、ヤイロの女やラザロの復活と異なり、再び死なざるの復活である。「また死あらず、哀み哭き痛みあることなし」といふ復活である。而して神はキリストを以て、末の日に此大なる復活を我等と我等の愛する者との上に行ひ給ふのである。我等の死にたる女が再び我等に予さるゝ時には、我等は再び之を失はないのである。復たど死別のない會合、之にまさりて歡ばしきことの此世に復とあるべけんや。(復活)

ソロモン神の爲に殿を建てたり。然れども至上き神は手にて造れる所に居たまはず、それは預言者の云へる如し、則ち主いひ給く天は我が座位なり、地はわが足臺なり、汝等わがために如何なる屋を建んとするか、又わが息む所は何處なるや、我が手は此すべての物を造らざりしや。(使徒行傳七章四七—五十節)

歐米諸國に於て既に腐敗の兆を示せる基督教を取り來り、之を日本に於て復活し、之に新生命を供し、以て再び之を世界に傳布せんとす、これ吾人の天職ならずや。然るに何を苦んで彼等の糟糠を嘗め、彼らの教會と青年會と共勵會とを眞似し、以て此地に英國又は米國の宗教そのまゝを移植せんと試むるや。基督教は人類の宗教にして英人または米人の宗教にあらず。吾人は之を取て吾人の宗教となすを得べし。外國的宗教は吾人に何の用なきなり。(獨短)

われ汝の事を耳にて聞きおたりしが今は目をもて汝を見たてまつる。是をもて我みづから恨み、塵灰の中にて悔ゆ。(ヨブ記四二章五、六節)

純潔なる思想は書を読んだのみで得られるものではない。心に多くの辛い實驗を経て、凡ての乞食的根性を去つて、多く祈つて、多く戦つて、然る後に神より與へられるものである。之を天才の出産物と見做すのは、大なる誤謬である。天才は名文を作る、然かも人の靈魂を活かすの思想を出さない。斯かる思想は血の凝結體である。心臓の肉の斷片である。故に刀を以て之を斷てば其中より生血の流れ出るものである。故に未だ血を以て争うた事のない者の到底判斷することの出来るものではない。文は文字ではない、思想である。さうして思想は血である、生命である。之を軽く見る者は生命そのものを輕蔑する者である。(感想)

イエス答へていひけるは、凡て此水を飲む者はまた渴ん、然ど我があたふる水を飲む者は永遠かわく事なし、且わが予ふる水は其の中にて泉となり、湧出て永生に至るべし。

(ヨハネ傳四章十三、十四節)

人の復活はイエス獨特の事業である。是れ彼を離れて行はるゝ事ではない。人は天然的に復活するのではない。イエスに由て復活せしめらるゝのである。故に云ふ「我れ末の日に之を甦らすべし」(ヨハネ傳六章五四節)と。「彼に生命あり」と言はれし彼れイエスが、彼が、甦らすべしとの事である。復活を自然的現象として之を解することは出来ない。復活は生命の新供給である、其の新發展である。故に生命の源なる神の子イエスに由てのみ行はるゝ事である。「我れ末の日に甦らすべし」と云ふ。人の言として妄言の極である。然れども生命の源なる神の子の言としては當然の言である。イエスは天より降りし生命のパンである。彼を食ひて人は生長し終に永生に達するのである。(研二)

また賜りしあまたの黙示によりて我が傲ることなからん爲に一つの刺を我が肉體に予ふ、  
 即ち我が傲ることなからん爲に我を撃サタンの使者なり。我これが爲に三次主に之を我よ  
 り離んことを求めたり。我に言給ひけるは我が恩なんぢに足れり蓋わが能は弱に於て全な  
 ればなり。この故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん、是キリストの能われに寓らん爲なり。

(コリント後書十二章七―九節)

最も善き聖書の註解はバインズに非ず、マイヤに非ず、クラークに非ず、最も

善き聖書の註解は人生の實驗其者なり。之れなからんか、凡ての學識、凡ての修  
 養を以てするも聖書の根本的教義を探る能はず。之れあらんか、いろは四十八文  
 字を読み得ば聖書の示す神の奥義を知るに難からず。教會より放逐され、國人に  
 迫害され、友人の裏切する所となりて、吾人は始めて基督教の眞髓なる十字架の  
 何たるかを知るを得べし。聖書が神の書たるの確證は、それが學識の書にあらず  
 して、實驗の書たるに存す。(所感)

まことに彼は我らの病患を負ひ、我らの悲みを擔へり。然るにわれら思へらく、彼は責め  
 られ、神にうたれ、苦めらるゝなりと。彼は我らの愆のために傷けられ、われらの不義の  
 ために碎かれ、みづから懲罰を受けてわれ等に平安を與ふ。そのうたれし痕によりて我等  
 は癒されたり。(イザヤ書五三章四、五節) 創世記三章二三、二四節参考

死と劔とは生命の樹を守て今日に至れり。われら之に近づかんと思すれば、山鳴  
 り地震ひて、我らの手の之に觸るゝを許さず。あゝ憐むべきは樂園を逐はれし人  
 類なるかな。然れども一人あり、彼は我等のために再び生命の樹に達する途を開  
 き給へり。ナザレのイエス彼なり。彼は自ら血を流してケルビムと焔の劔の間に  
 我等の歩むべき途を開き給へり。然り、血を流すにあらざれば途は開けざりき。  
 然れども人が政治的自由を得んがために血を流すが如くにあらずして、彼は獨り  
 自ら我等の愆を擔ひ、我らの罪の祭物として献げられ給へり。彼に由てエデン回  
 復の端緒は開かれたり。我らは失望を去て可なり。神の愛は終にその律法に勝て  
 り。焔の劔は今我等の身に害を加へざるに至りぬ。(洪)



その靈魂は墓に近より、その生命は滅す者に近づく。しかる時にもし彼とともに一箇の使者あり、千の中の一箇にして中保となり、正しき道を人に示さば、神かれを憫れみて言たまはん、彼を救ひて墓にくだること無らしめよ、我すでに收贖の物を得たりと。

(ヨブ記三三章二二―二四節)

キリスト救世の業は二様なりき。一は人類に完全なる生涯を教ふるにあり。二は人類の罪を彼の身に負うて之を削除するにあり。前者は救世の最終目的にして、後者は前者に導くの必要手段なり(ペテロ前書二章十二節)。完全なる人を作らんと欲せば、先づ人を不完全ならしむる罪を除かざるべからず。何となれば人その罪より脱せざれば、罪を犯さざるに至らざればなり。(求安)

愛する者よわれら互に相愛すべし、愛は神より出ればなり。おほよそ愛ある者は神によりて生れ且神を識るなり。愛なき者は神を識らず、神は即ち愛なればなり。

(ヨハネ第一書四章七、八節)

最高のオルソドキシ―(正統教)とはキリストの心を以て兄弟を愛することなり。キリストの慈愛なく、その忍容と従順となくして、吾等如何なる教義を固信するも未だ以て真個の正教徒を以て自から任する能はず。若し吾等の奉ずる教義にして吾等をキリストの如き者たらしめずば、吾等は自身の信仰に就て大に疑念を懐く可なり。吾等は信仰に於て鞏固なるに先ちて、心情に於てキリストの如く温和なるを要す。(所感)

かくてダビデその子ソロモンに言けるは汝心を強くし勇みてこれを爲せ。懼るゝ勿れ慄くなかれ。エホバ神我神汝とともに在さん。彼かならず汝を離れず汝を棄てず、汝をしてエホバの家の奉事の諸の工を成終へしめ給ふべし。(歴代志略上二八章二十節)

メソヂスト派の始祖ジョン・ウエスレー死するの前日、彼れ友人に向ひ數回繰返して曰く、「何よりも善きことは神我等と共に在すことなり」と。神は萬物の靈たる人間の有するものゝ中にて最も善なる、最も貴きものなり。神は財産に勝り、身體の健康に勝り、妻子に勝りたる我が所有物なり。富は盜まるゝ懼と浪費さるゝの心配あり。國も教會も友人も我を捨てん。事業は我を高ぶらしめ、肉體も亦我は之を失はざるを得ず。然れども永遠より永遠に至るまで我の所有し得べきは神なり。人の尊貴きは、彼は最も高き神より以下のものを以て満足する能はざるによるなり。(慰め)

われ神の恩賜すなはちその能の感動を以て我に賜ひし恩によりて此福音の役者となれり。諸ての聖徒の中に最微者よりも微き我にこの恩を賜ひて、測ること能はざるキリストの富を異邦人に傳へ、且イエスキリストを以て萬物を造りし神の中に世の始より以來かくれたる奥義如何を衆の人に悟らしむ。(エペソ書三章七―九節)

人の爲めにする傳道、是れ何人も従事し得る傳道なり。是れ傳道免許を要せざる傳道なり。教權なるものは今は全く我に用あるなし。真理其者が我の證人なり。我頭上に千百の手の載せらるゝありて、我の姓名に冠するに、教師、博士等崇嚴なる稱號有り餘る程を以てするも、貧者若し我に依て天の慰藉に與かるを得ずば、我の授かりし按手禮は空式のみ、虚禮のみ、以て厘毫の價値を我に加ふるを得ず。愛に律法あることなし。傳道の自由は、我に他人に與ふべき眞善の存する時にあり。(傳道)

神は窮なき生をもて我等に賜ふ、この生は乃ちその子にあり、これその證なり。神の子をもつ者は生をもち、その子をもたざる者は生をもたず。

(ヨハネ第一書五章十一、十二節)

新事業を求めんと欲せざれ、新生命を求めよ。新事業は必ずしも新生命を生まず、然れども新生命は多くの場合に於ては新事業を作る。成功の秘訣は之を外に於て求むべからず、衷に於て求むべし。而して衷より出たる新事業は常に健全にして常に永續す。余輩が人に新生命を勧むるは豈惟り宗教道德のためのみならんや。(所感)

もろくの民はさわぎたちもろくの國はうごきたり、神その聲をいだしたまへば地はやがてとけぬ。萬軍のエホバはわれらとともなり、ヤコブの神はわれらのたかき楯なり。きたりてエホバの事跡をみよ、エホバはおほくの懼るべきことを地になしたまへり。

(詩篇四六篇六一八節)

奇蹟とは神の能力の發現でありますから、神の存在と活動とを信する者の眼には奇蹟と天然の別はありません。彼に取りては、實は天然と稱して、神より全く離れ獨り働いて獨り生ずる者ではないのであります。彼には唯二種の奇蹟があるのであります。尋常的奇蹟、これが天然であります。非常的奇蹟、これが聖書に示してあるやうな奇蹟であります。今日まで萬物を天然的に解し來りし彼は、今は意志的に、即ち奇蹟的に之を解するに至りました。彼の宇宙觀は神を信するに由りて一變致しました。(問答)

なんぢら前には諸の罪と身に割禮なきとによりて死たる者なり。されど神なんぢらをして凡の罪を赦し彼と偕に生しめ、かつ手にて録し、所のわれらを攻る規條の書すなはち我等に逆ふものを塗抹、これを中間より取去り、釘を以て其の十字架に釘たまへり。

(コロサイ書二章十三、十四節)

我等は不義の子である。神の子と稱へらるゝに足らぬ者である。然るに神は我等を憐み給ふ。其窮りなき憐愍に因り其獨子を降し給ひ、彼をして完全き人たるの生涯を送らしめ、義を完全に行はしめ給ひ、而して彼を人類の代表者として受け給ひ、彼に在りて人類を救し、之を義とし聖め且つ贖ひ給うた。神は今やキリストに在りて人類を視給ふのである。神の眼中に今や罪に死にたる人類あるなく、唯義に生きたる人の子、即ち人類の代表者なるキリストイエスあるのみである。茲に於てか人は自己の罪に死にたる事と、キリストの自己に代りて義を完行うし給ひしこととを自覺し、且自白すれば、其時直ちに救はるゝのである。我等は既に贖はれて世に在るからである。(研二)

兄弟よなんぢら主の名に託て語りし預言者を苦と忍との式とすべし。われら忍ぶ者は福なりと意ふなり。汝等會てヨブの忍を聞けり、主いかに彼に行給ひしかその結局を見よ、即ち主は慈悲深く且衿恤ある者なり。(ヤコブ書五章十、十一節)

患難を避けしめ給はない、之に陥いらしめ給ふ、而して其中より救出し給ふ。患難をして充分に働かしめ給ふ、火をして燬盡すだけを燬盡さしめ給ふ、而して其中より救ひ出し給ふ。患難を避くるは之に勝つの途ではない。患難は之に當り、一たび其呑む所となりてのみ終に能く之に勝つ事が出来る。これが眞正の救済である。死は死に由てのみ之を滅すことが出来る(希伯來書二章十四節)。患難は患難の中を通らずして之に勝つことが出来ない。神は信者を患難の中より救出し給ふ。而して完全に彼を救ひ給ふ。(復活)

斯してアブラハム手を舒べ刀を執りて其の子を宰んとす。時にエホバの使者天より彼を呼てアブラハムよアブラハムよと言へり。彼言ふ我此にあり。使者言けるは汝の手を童子に按るなかれ、また何をも彼に爲べからず。汝の子即ち汝の獨子をも我ために惜まざれば、我今なんぢが神を畏るゝを知ると。茲にアブラハム目を擧げて視れば、後に牡綿羊ありて其の角林叢に繋りたり。アブラハム即ち往て其の牡綿羊を執へ、之を其の子の代に燔祭として獻げたり。(創世記二二章十一―十三節)

エホバは憐憫の神である。其子を苦めんと欲して苦め給ふのではない、其罪の本源たる利己の心を殺がんがために苦め給ふのである。既に犠牲の決心と行爲とが現はれて、エホバは其餘を要求し給はない。天より聲あり、アブラハムに告げて曰うた「汝の手を童子に按くる勿れ」と。嗚呼救ひ！ 然り恩恵！ 愛子を一たび神に獻げて彼は再び神より之を與へられた。アブラハムは茲に再び犠牲の何たるかを覺つた。犠牲は棄てるのではない、更に得るのである。燔祭の供物は神御自身別に之を備へ給うた。牡羊は林叢の中に繋がれて在つた。(舊約)

われらが救を得るは望によれり、然ど望を見ばまた望なし、既に見るところの者は何で尙これを望んや。若われら未だ見ざる者を望まば忍て之を待つべし。聖靈もまたわれらの荏弱を助く。我等は祈るべき所を知らざれども聖靈みづから言がたきの慨歎を以て我等の爲に祈りぬ。人の心を察たまふ者は聖靈の意をも知れり、蓋神の心に遵ひて聖徒の爲に祈ればなり。(ロマ書八章二四―二七節)

神は聖靈として人の靈に臨み給ふ。聖靈として光を供し、聖靈として能を加へ、聖靈として萬事を遂げ給ふ。聖靈に由りてある。信者は聖靈に由らずして何事も爲すことが出来ない。彼は聖靈によりて祈り、聖靈によりて萬事を究ね知る。神の能なる聖靈によりて神に到り、神の光なる聖靈によりて神を知る。基督信者は元來他動的である、自動的でない。上より求められし者であつて、下より求めし者ではない。彼の信仰其者さへ聖靈に由りて起されし者であつて、彼れ自から求めて起りし者でない。聖靈に由りてある。(研二)

兄弟よ忍びて主の臨るを待つべし。視よ農夫地の貴き産を得るを望みて前と後との雨を得るまで永く忍びて之を待てり。汝等も忍べ、なんぢらの心を堅うせよ、蓋主の臨り給ふこと近ければなり。(ヤコブ書五章七、八節)

人をして非俗的ならしめ、無欲ならしめ、非現世的ならしむる者にして、鮮明にして確實なる來世の希望の如きはないのである。此希望を缺いて、此罪の世に在りて信者の生涯を送ることは出来ない。此世の不義は餘りに多くある。暗黒の勢力は餘りに強くある。此世のみに意を留めて、不信は當然の結果と言はざるを得ない。然れども目を舉げて上を仰がんか、聖書に示されたる神の約束を信せんか、完成さるべき造化と救拯とを望まんか、茲に懷疑の雲霧は晴れて正義敢行の勇氣は勃然として湧出るのである。キリスト再臨の希望は信者の歌の源である、愛の動機である、善行の奨励である。これありて我等は此涙の谷に在りて、歌ひつゝ我父の家へと進み行くことが出来るのである。(研二)

これ即ち汝等工匠の棄し所の石、屋の隅の首石となれる者なり。此ほか別に救ある事なし、蓋天下の人の中に我等のよりたのみて救はるべき他の名を賜さればなり。

(使徒行傳四章十一、十二節)

新約聖書は或一つの明白なる、確實なることを傳へる、それは主イエスキリストである。彼が其主人公であるのである。彼を世に示さんがために其二十七書は書かれたのである。彼を種々の方面より見たる其記録が新約聖書である。其見方の異なるは見る立場と人との異なるからである。而して異なりたる方面より異なりたる人が見て、茲に最も完全に彼が世に示されたのである。我等はキリストを知らんと欲して聖書を學ぶのである。而して人は必しもその發せし言辭ではない、又必しも其爲せし行でもない、其言辭と行爲とを通して傳はる精神である、靈である。我らはキリストの精神を知り其靈を受けんために聖書に行くのである。(研二)

ひとりの嬰兒われらのために生れたり。われらはひとりの子をあたへられたり。政事はその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神、とこしへの父、平和の君となへられん。その政事と平和とはましくはよりて窮りなし、且ダビデの位にすわりてその國ををさめ、今よりのちとこしへに公平と正義とをもてこれを立てこれを保ち給はん。萬軍のエホバの熱心これを成すべし。(イザヤ書九章六、七節)

實に欲しき者は此信仰である。キリストと彼の十字架の外に信仰の理由を求めざる信仰である。其證明を此世の事業の成功に於て求めざる信仰である。之を自己の聖成に於て求めざる信仰である。單純なる信仰である。大膽なる信仰である。イエスキリストと彼の十字架の外に、社會事業も我道徳も要らないといふ信仰である。恰もコロンブスが天の星に頼るの外、陸上何物をも標的として有つことなくして、大洋に乗出でし時のやうなる信仰である。而して此信仰があつてこそ、我等は大宇宙に逍遙し、人を恐れず罪を恐れず大聲疾呼して、新大陸ならぬ新エレサレムへと我等の船を乗出すことが出来るのである。(研二)

是わが切に願ふところ望ところ、即ち我が凡の事に愧ることなく、今も常の如く臆せず、生るにも死るにもキリストをして我が身によりて尊められしめんと意ふに應へり。

(ピリピ一章二十節)

我名は消ゆるも可なり、願くは神の聖名の崇められんことを。我教會は失するも可なり、願くは我同胞の救はれんことを。我と我に屬する凡てのものは消盡さるゝも、我神の榮光の日々に益々揚らんことを。(所感)

萬よろ人救のひとすくひをうけ眞理まことを曉さとるに至いたるは神かみの望のぞみ給たまふ所ところなり。それ神かみは一位ひとりなり、又神かみと人ひととの間あひだに一位ひとりの中保なかだちあり即すなはち人ひとなるキリストイエスなり。かれ萬よろ人に代おのれり己おのれを棄あがて贖あがなひなせり、時ときいたらば證あかしすべし。(テモテ前書二章四―六節)

單たん純じゆんなる信しん仰かう、信しん仰かうのみの信しん仰かう、結けつ果くわに目めを注そがざる信しん仰かう、信しん仰かうのみに以もつて滿まん足ぞくする信しん仰かう——此この信しん仰かうが有あつて信しん者じやに初はじめて眞しんの平へい和わがあるのである。主しゆイエスが「我われ汝なんぢに平やす和きを與あたへん」と言いひ給たまひしは此この平へい和わである。「人ひとのすべて意おもふところところに過すぐる平やす和き」とパウロが言いひしは此この平へい和わである。是これは深ふかい信しん仰かうである、強つよい信しん仰かうである、堅かたい信しん仰かうである。此この信しん仰かうがあつてこそ信しん者じやは世よに勝かつことことが出來できるのである。律りつ法ぽうの行なを離はなれて顯あらはれたる神かみの義ぎの信しん仰かう、此この信しん仰かうに由よりてのみ大おほいなる事じ業げふは成な就じゆげらるゝのである、大だい文ぶん學がくは出いづるのである、大だい美び術じゆつは現あらはるゝのである、大だい國こく家は興おこりて大だい政せい治ちは行おこなはるゝのである、社しゃ會かいはその根こん柢ていより改あらためらるゝのである。(研二)

この故ゆゑに我われ神かみの事ことに就つてはイエスキリストによりて誇こほる所ところあり。何なんとなればキリスト我われを助たすけ異い邦ほう人じんを順したがはしめん爲ために休しよ微ゐと奇き跡せきの能あたら神かみの靈たまの能あたらを顯あらはし、言ことばと行なとを以もつてエルサレムより偏あまねくイルリコに至いたるまで其その福ふく音いんを傳つたへ給たまひしことことの他ほかは一ひとの言ことばをも我われ敢あへて曰いはざるなり。且かつわれ慎つしみて他人たにんの置おきし土ど基だいに建たじと、イエスの名なの未いまだ稱とよへられざる所ところに福ふく音いんを宣のたまへたり。(ロマ書十五章十七―二十節)

我われ我わが事ことを爲なすに方あたりて富ふ豪かうの寄き附ふを仰あぐを須もちひず、我われの事ことふる天てんの父ちちは天てん地ち萬ばん有いうの造つくり主ぬしなり。我われ我わが志こころを伸のぶるに方あたりて社しゃ會かいの賛さん同どうを得うるを要えせず、我われの友ともなる天てん使しは寶みくら座ざに近ちかく我わがために祈いのる。我われに糧かてあり、聖せい書しょにあり。我われに力ちからあり、祈きたう禱たうに存ぞんす。我われは單たん獨どくにして世せ界かいを相あ互ひてに戰たたかひ得えるなり。(所感)



エホバを畏るゝことは智慧の訓なり。謙遜は尊貴に先だつ。(箴言十五章三十三節)

謙遜なれ、柔和なれ、然れども意氣地無したる勿れ。謙遜は勇氣なり、然れども意氣地無しは卑怯なり。二者その外貌に於て相似て、其内容に於て全く相異なる。而して世に所謂基督的謙遜なるものにして、卑怯の結果なるもの多し。我らの謙遜をして有りあまるの能力を有する者の謙遜ならしめよ。世の壓迫を怖れて萎縮するの謙遜(退縮)ならしむる勿れ。(問答)

その生命を惜む者は之を喪ひ、其生命を惜ざる者はこれを存て永生に至るべし。人も我に事んとせば我に従ふべし、我に事ふる者は我が在る所に在らん、人もし我に事ふれば我が父はこれを貴ぶべし。(ヨハネ傳十二章二十五、二六節)

幸福は人生最大の獲物ではない、義務は幸福に優りて更に貴くある。義務の故に我らは度々幸福を棄てざるを得ない。而して義務のために我等の蒙る損失は決して損失でないのである。エフタは彼の幸福を犠牲に供して彼の國を救うた。而してエフタの女は彼女の生命を犠牲に供して彼女の父の心を聖めた(士師記十一章参照)。犠牲に犠牲、人生は犠牲である。犠牲なくして人生は無意味である。幸福は人生の目的ではない、犠牲こそ人生の華なれである。もしイスラエルを救はんがためにエフタの苦痛が必要であり、而してエフタ自身を救はんがために彼女の死が必要でありしとならば(而して余は必要でありしと信する)、神の聖名は讚美すべきである。エフタは無益に苦まず、彼女の女は無益に死ななかつた。神は斯くの如くにして人と國とを救ひ給ふのである。(舊約)

それイエスは苦難を受し後おほくの確據なる證を以て己の活たる事を現し、四十日の間かれらに見え神の國の事に就て語り、また彼等と偕に集り居て命じけるは、汝等エルサレムを離れずして我に聞ける所の父の約束し給ひし事を待つべし、蓋ヨハネは水を以てバプテスマを施たれども汝等は久からずして聖靈によりバプテスマを受けなければなりと。

(使徒行傳一章三―五節)

私はまことに奇蹟を信じます。奇蹟を信せずして基督教は信せられませんが、

奇蹟を信せずして如何なる宗教も信せられません。私の考へまするに、奇蹟を排斥しますならば、其れと同時に宗教を排斥すべきであると思ひます。奇蹟を否定しながら宗教の必要を説くのは、飲食の不要を唱へながら健康の幸福を説く類であると思ひます。奇蹟は宗教の滋養であります、この養汁ありてこそ、宗教なる生物は存在し且つ繁殖するのであります。奇蹟を取除いて御覽なさい、宗教といふ宗教は皆な死んでしまひます。(問答)

キリスト我等の爲に己の身を舍給へり、是我等をすべての罪より贖ひ出し、且己の爲に一の民を潔め之をして熱心に善事を行はしめん爲なり。(テトス書二章十四節)

是れは道徳的實驗であります。即ち良心の必然的命令に由て自己を糺して見ました結果、自己の神に叛き、幽暗を好むものであることを發見し、此罪人を救ふに足るの救主を求めて、終に茲にキリストに接して、此痛める良心を醫すに足るの或者を看出すに至つたのであります。さうして私は罪とは人に對して犯した者ではなくして、神に對して犯した者であることを知りまする故に、此罪の苦悶を取去つてくれた者は必ず神でなくてはならないことを知つたのであります。(問答)

聖書はなんぢをしてキリストイエスを信するによりて救を得しめん爲に智慧を予ふるものなり。聖書はみな神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學ばしむるに益あり。これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なり。

(テモテ後書三章十五—十七節)

著者の判然せざる聖書は信賴するに足らないかと云ふに、決してさうではない。聖書は聖書其物のために貴いのであつて、其著者のために貴いのではない。眞理は其物自身の證明者であるから、自身を人に紹介するに當つて人の證明を待たない。何もモーセの言であるからとて貴いのではない、神の眞理であるが故に貴いのである。我らはダビデやソロモンに教へられんと欲しない、神の聖靈に導かれたく欲ふ。預言者エレミヤは我等の如き弱き人であつた、併し彼の口より神の言葉が出た。我らは預言者自身を尊まない、彼を以て我らを教へ給ふ神に感謝する。(研)

汝ら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ、斯るものは何ぞかぞふるに足らん。

(イザヤ書二章二二節)

正義と言ふ勿れ、恩恵と言へ。清淨と云ふ勿れ、赦免と言へ。正義清淨は人にあるなし。之を彼より要求して我等は失望せざるを得ず。然れども神の恩恵は限りなく存し、其清淨は盡くることなし。神に依て人を救はんと欲すべし、人に依て世を救はんと望むべからず。人を扶け世を救ふの途は、單に神の救拯の水をして盡きざる河の如くに流れしむるにあり。(所感)

イエス少し進行きて地にふし祈りて曰けるは若かなはゞ此時を去らしめ給へ。また曰けるはアバ父よなんぢに於ては凡の事能ざるなし、この杯を我より取たまへ、されど我が欲ふ所を成んとするにあらず、汝が欲ふ所に任せ給へ。(マコ傳十四章三五、三六節)

ア、神よ、我等をして爾を偉大なる神として解せしめよ。我等の切望とあれば何事によらず之を聞き納れ給ふが如き、我等に肖たる小なる神として爾を了らしむる勿れ。我等をして爾の前に平伏せしめよ。爾が爾の聖顔を我等より背け給ふ時に、我等をして爾は我等の聖父なることを認めしめよ。爾に我等の祈禱を悉く聞き納れらるゝは善し。然れども爾の聖旨のまゝに導かるゝは更らに善し。我等をして爾に何事をも注文する所あらしむる勿れ。我等をして自から善惡を定めしむる勿れ。汝の爲し給ふ所……疾病にあれ、饑餓にあれ、裸程にあれ……是れ善なりと稱せしめよ、アーメン。(感想)

兄弟よ汝等の憂戚は望なき他人の如くならざらんことを欲ふが故に、われらすでに寢れる者に就ては汝等の知らせを好まず。我等もしイエスの死に甦りし事を信するならば、イエスによれる所の既に寢れる者を神かれと偕に携へ來らんことをも信すべきなり。

(テサロニケ前書四章十三、十四節)

死は大事である、併し最大事ではない。死は取返しのかぬ災厄ではない。死は肉體の死である、靈魂の死ではない。形體の消失である、生命の湮滅ではない。我等は死して永久に別れるのではない、我らは後に又復び會ふのである。人生の大事は死ではない、罪である。天地の主なる神に背き、生命の泉より離るゝ事である。故に神は人を死より免かれしめんと其途を取り給はなかつた。併しながら彼等を罪より救はんとして其獨子を遣り給うた。死の刺は罪である、罪が除かれて死は死でなくなるのである。(復活)

なんぢら心に變ること勿れ、神を信じまた我を信すべし。わが父の家には第宅おほし然すば我預て汝等に之を告べきなり。我なんぢらの爲に所を備に往く。もし往きて我なんぢらの爲に所を備ば又來りて汝等を我に納べし、我がをる所に汝等をも居らしめんとてなり。

(ヨハネ傳十四章一—三節)

此世に於ける余の生涯は何うでも可い。憎まるゝも可い、誤解せらるゝも可い、貧しきも可い、裸なるも可い。余の永久の運命は此世に於ける余の境遇に由て定められる者でない。余の運命を定める者は、余のために自己を棄て給ひし余の救主イエスキリストである。彼は余のために所を備へんために父の許に往き給うた。彼は又來りて汝等を我に納くべしと約束し給うた。余はこの世に在ては遠人である。暫時の滯留者である。余は一時天幕を此地に張る者である。永久の住家を築く者ではない。神が余を呼び給ふ時には直に天幕の綱を絶ち、之を疊んで彼の國へと急ぐ者である。(感想)

汝の心を教に用ゐ、汝の耳を知識の言に傾けよ。(箴言二三章十二節)

聖書は何が故に神の言辭であるかと云ふに、勿論其中に神にあらざれば到底語ることの出来ない事が書いてあるからである。其文章の優劣は我等の論ずる所ではない。歴史的事實の錯誤の如き、科學的證明の不足の如き、以て神の聖旨の如何を示すに當つては左程大切なる事柄ではない。我等は人生に關し、宇宙に關する神の眞理を識りたく欲ふものである。さうして聖書は最も明白に我らの要求する此説明を與へてくれるのである。即ち聖書の完全なるは其辭句文章等の外形に在るのではなくして、之を一徹する神の聖旨に存するのである。聖書が神の言辭であるといふのは、其中に神の心が充ち溢れて居るからである。(研)

愛する者よ汝等を試むる火の如き苦を非常の如くして汝等異とする勿れ、却てキリストの苦に與るを以て歡樂とすべし、然ば其の榮の顯はれんときまた汝等喜び躍らん。

(ペテロ前書四章十二、十三節)

恩恵とは身の幸福ではない、靈の光明である。財貨とは全世界ではない、眼に見えざる眞の神である、唯一の眞の神である。唯一の眞の神と其遣し給ひしキリストを識ること、是が永生である、最大幸福である、最大の賚賜である。而して此至大至高の恩恵に與からんがためには、貧も可なりである、世と友人とに棄てらるゝも可なりである、疾病も可なりである。然り、死其物も可なりである。余輩はイエスに在りて、死其物に於てすら神の笑顔を拜し奉るのである。(復活)

我これらの望を既に得たりと言ふにあらず、またすでに全せられたりと言ふにあらず、或は取ことあらんとて、我たゞ之を追求む、キリスト之を得せんと我を執へ給へるなり。兄弟よ我みづから之を取れりと意はず、惟この一事を務む、即ち後に在るものを忘れ前に在るものを望み、神キリストイエスによりて上へ召て賜ふ所の褒美を得んと標準に向ひて進むなり。(ピリピ書三章十二―十四節)

基督教は人を善の器となすものにして、先哲が以て詩人の夢想と認めし最大希望を我等に於て充たすべしと宣言するものなり。我若し基督教に由て未だ此完全に達する道を得ざれば、我は未だ基督教を解せざる者なり。基督信者は大望を抱かざるべからず。在印度宣教師ウキリアム・ケリー曰く Attempt great things for God, expect great things from God. (神の爲に大事を計劃し、神より大事を望め)と。我は人力の及ばざる大變化を我身に來たさんと欲するものなり。(求安)

是に於て義者かれに答へて云はん、主よ何時なんぢの飢たるを見て食せまた渴たるに飲しよや、何時主の旅したるを見て宿らせ又裸なるに衣しや、何時主の病みまた獄に在るを見て汝に至りしや。王こたへて彼等に曰ん、我まことに汝等に告ん既に汝等わがこの兄弟の最徴者の一人に行へるは即ち我に行しなり。(マタイ傳二五章三七—四十節)

聖クリストム曰く「真正なる神殿は人なり」と。北斗、參宿、昴宿の密室、是れ神の宿り給ふ所にあらず。雷霆奔鳴して山河搖撼する時、是れ神が吾人に語り給ふ時にあらず。嬰兒槽に臥する處、是れ眞神が世に臨み給ひし所なり。神は人にあり。彼は人に於て吾人の敬愛と信従とを要求し給ふ。人に事ふるは神に事ふることにして、人を離れて神に事ふること能はず。(傳道)

ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ、汝はわが僕なり、我なんぢを造れり、汝はわが僕なり、イスラエルよ我はなんぢを忘れじ、我なんぢの愆を雲のごとくに消し、なんぢの罪を霧の如くにちらせり、なんぢ我にかへれ我なんぢを贖ひたればなり。

(イザヤ書四四章二一、二二節)

若し救はるゝは我が行爲又は我が信仰に由るならんか、我は今猶危地に立つ者なり。そは我は何時罪を犯し、我が信仰は何時冷却し、又何時變移するや、期すべからざれば也。然れども我は聖書に由りて救拯の我が行爲又は信仰に由るに非ずして、變りなき神の變りなき聖旨に基くを知りて、我に始めて眞個の平安あるなり。其時我は我が行爲の不完全を意とせず、我が信仰の冷却を恐れず、榮へる罪の重荷を脱して、憚らずして神の至聖所に入るを得るなり(ヘブル書十章十九節)。神若し我が味方たらば誰か我に敵せんや。我れ我神が其無限の愛を以て我を豫め其救拯に定め給へりと識りて、我は世の反對を恐れず、教會の否認を恐れず、我が罪と不信とを恐れず、唯「我は信ず」と言ひて一直線に進むなり。(感想)

そは一たび光照をえ天の賜をうけ聖靈を蒙り、神の善言と來世の權能とを嘗ひて後墮落するものは、神の子を再び十字架につけて顯辱とするが故に、また之を悔改に立返らすこと能はざるなり。(ヘブル書六章四―六節)

神に逆ひたればとて其刑罰として直ちに病に罹り、貧に迫り、又は社會の地位を失ふものではない。否、多くの場合に於ては身の境遇の改善は神を捨去りし結果として來るものである。神に逆ひし靦面の刑罰は品性の墮落である。即ち聖きことゝ高きことゝが見えなくなつて、卑しきことゝ低き事とを追求するやうになることである。然し乍ら是れ最も恐る可き刑罰であつて、人に取て實は是れよりも重い刑罰はないのである。さうして此刑罰の殊に重い譯は之を受けし者が其の刑罰たるを解し得ない事である。我等は神に祈て如何なる他の刑罰を受くとも此恐るべき品性墮落の刑罰を受けざるやう努むべきである。(感想)

是故に我なんぢらに示さん、神の靈に感じて語る者はイエスを誣ふべき者と謂ものなし。又人聖靈に感ぜざればイエスを主と謂あたはず。(コリント前書十二章三節)

聖靈は神が人類に賜ふ最大の賜物である。然し賜物であるからと云うて物ではない。觸れ、量り、分析することの出来るものではない。靈は氣である、勇氣である、正氣である、道徳的感化力である。聖靈をみたまと訓んで瑤玉の更に精化したる者であるかのやうに解するのは大なる誤である。聖靈は靈である、故に氣である、精神である、生命である、心である、情である。故に道徳的感化力として我等に臨み、其中に愛を生じ、信仰を起すものである。聖靈に鴿の形もなければ焔の熱もない。我等はたゞ之を我等の靈の力、光、生として感ずるまでである。(研)



エホバ神士を以て野の諸の獸と天空の諸の鳥を造りたまひて、アダムの之を何と名くるかを見んとて之を彼の所に率ゐたりたまへり。アダムが生物に名けたる所は皆其の名となりぬ。(創世記二章十九節)

人は神に倣りて造られし者なり。故に彼は神の意匠を究むるの理解力を有す。神が天然物を造り給ひし目的の一は、人智を發達鍛錬せんとするにありたり。神の造り給ひし物を究めて、吾人の智能を研磨するは吾人の當に爲すべき事なり。神はその造り給ひし獸と鳥とを率ゐりて之をアダムに示し、彼をして之を學ばしめ給ひしとなり。依て知る博物學の研究は人類が創造の初に於て神より直に示されしものなる事を。神の造り給ひしものを直接に神より受けて之を學ぶ。神を知り、眞理を究むるの方法にして何者か之にまさる者あらんや。博物學は人類最初の學問なり。獸を分類すること、鳥を説明すること、これアダムの受けし教育なりき。美はしきかな天然學、害なくして益多く、天然を通して直に天然の神に達す。來れ人よ、來りて森に禽鳥の聲を聴き、出で、山に野獸の常性を學べよ。(洪)

我また一人の強き天の使大なる聲を發して誰か此卷を開き封印を解に堪るやと宣傳るを見たり。然るに天にも地にも地の下にも此卷を開き又これを見ることを得る者なし、一人として此卷を開き又これを見るに堪る者なきが故に我甚だしく哭けり。彼の長老の一人われに曰けるは、哭なかれユダの支派より出たる獅子ダビデの根すでに勝を得たれば此卷を開き又この七の封印を解ことを得るなり。(默示録五章二一五節)

若し人の力に依て此罪惡世界が救はれるものならば、そんな人は何處に居ますか。病人は病人を救ふことは出来ません。不義の人が他人の不義を治すことの出來よう筈が御座いません。社會全體が腐敗して居る時に、其一分子たる人が立て之を救ひ得よう筈がありません。若し救ひ得るならば彼は社會の力に依て救ふのではありません、社會以上の力、即ち神の力に依て救ふのであります。故に社會を救ふに社會其物に頼らなければならぬとならば、社會救濟事業など云ふ事は、到底出來ない事で御座います。(座談)

此等は皆信仰を懐きて死ねり。未だ約束の者を受ざりしが遙かに之を望て喜び地に在りては自ら賓旅なり、寄寓者なりと言へり。如此いふ者は家郷を尋る事を表す也。彼等もしその出し地を念はゞ歸るべきの機ありしなるべし。然ど彼等は更に愈れる所すなはち天にあるところを慕へり。是故に神は其神と稱することを恥とせざりき。蓋かれらの爲に京城を備へ給ふればなり。(ヘブル書十一章十三—十六節)

地は人類の住處なりと云ふ、然らざるなり。地は人類の墓地なり。彼の住處は他に在り、「手にて造らざる窮りなく存つ所の屋なり」。地の花は彼の墓を飾るに善し、其山は彼の遺骸を託するに適す。然れども地其物は彼の住所となすに足らず。地に就て争ふ者は誰ぞや。政治は墓地の整理ならずや、戦争は墓地の争奪ならずや。永久の住所を有する我等は喜んで地は之を他人に譲るべきなり。(感想)

彼我に言ひたまふ是等の骨に預言し之に言べし、枯れたる骨よエホバの言を聞け、主エホバ是らの骨に斯く言たまふ、視よ我汝らの中に氣息を入しめて汝等を生しめん、われ筋を汝らの上に作り肉を汝らの上に生ぜしめ、皮をもて汝らを蔽ひ、氣息を汝らの中に與へて汝らを生しめん、汝ら我がエホバなるを知らん。(エゼキエル書三十七章四—六節)

「其兒子の無きが故に慰めを得ず」と云ふ(マタイ傳二章十八節)。然し唯一つ慰めを得るの途があるのである。若し何かの方法に由り愛する者が再び活くるを得るならば、若し今は眼を閉ぎ唇を緘るものが、何かの能力により、活きて再び前に立ち、我と共に語り、我愛を受け又我に愛を供するならば、一言以て之を謂はば、彼が若し復活するならば、其時は我は實に慰を得て、わが悲歎は完全に癒さるのである。人は復活と聞いて笑ふなれども、然れども、復活は死別の苦痛に悩む者に何人にも起る希望である。永久の離別は我等の忍ぶ能はざる所である。復活の希望なくして、再會の期待なくして、死は「慰を得ざる苦痛」である。(復活)

我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始ギリシヤ人すべて信する者を救んと神の大能たればなり。神の義は此に顯れて信仰より信仰に至れり、録して義人は信仰に由て生べしとあるが如し。(ロマ書一章十六、十七節)

私は確かに信じます。基督教は奇蹟を離れて論ぜらるべきものではありません。奇蹟を引抜いて後に残つたキリストの教訓が基督教であるならば、基督教とは實に微弱なる宗教であります。基督教の能力ある所以は最も高尚なる道徳を奇蹟を以て強ゆるからであります。若し其教訓が光でありますならば、其奇蹟は實に力であります。力なき光は個人と社會と國家とを全然改造し得る光ではありません。(座談)

人を惑す者に似たれども眞實、人に知られざるに似たれども人に知られ、死にたる者に似たれども生るもの、責を受くるに似たれども殺されず、憂ふるに似たれども常に喜び、貧きに似たれども多の人を富まし、何も有ざるに似たれども凡の物を有り。

(コリント後書六章九、十節)

「何も有たざるに似たれども凡ての物を有てり」とは基督教者の事である。我等に土地一寸もなければ宇宙萬物は凡て我等の屬である。我等の家は雨を漏らし、風に脆きも我等は千代經し岩を隠家となす者である。我等を養ふに美味はなければも我等は天の靈を呼吸して生くる者である。世に實は我等に優る富者はないのである。(感想)

汝いにしへ地の基をすゑたまへり、天もまたなんぢの御手の工なり。これらは亡びん、されど汝はつねに存らへたまはん。これらはみな衣のごとく古びん、汝これらを袍のごとく更へたまはん。されば彼等はかはらん。然れども汝はかはることなし。なんぢの齡はをはらざるなり。(詩篇百二篇二五―二七節)

所謂現世的宗教は宗教ではありません。來世を明かにする故に宗教は殊に人生に必要なのであります。殊に此事を明かにするが故に基督教は殊に必要なのであります。「キリスト死を廢し福音を以て(永遠の)生命と壞ちざる事を明かにせり」とあります(テモテ後書一章十節)。キリストに由りて來世は明かになつたのであります。彼に由て私供彼の弟子等は今此世に在て猶ほ希望の中に私供の戦ひを續けて居るのであります。而かもキリストは決して私供より遠く離れて在すのではありません、唯幕一枚であります。彼は幕の彼方にありて私供の祈禱を聞き、いと近き援助として在し給ふのであります。(復活)

なんぢら聖書に永生ありと意て之を探索ぶ、この聖書は我について證する者なり。

(ヨハネ傳五章三九節)

聖書は一名之をイエスキリストの傳記と云うても宜いと思ひます。其の舊約聖書なるものは、キリストが此世に生れ來る迄の準備を述べたものであつて、新約聖書はキリストの此世に於ける行動や、或は直接にキリストに接した人の言行等を傳へたものであります。若し聖書の中からキリストと云ふ人物を取除いて見るならば、丁度穹形の石橋より樞石を引抜いたやうなもので御座いまして、其全體が意味も形像もないものとなるだらうと思ひます。聖書の解し難いのは文字の故ではなく、又理論の込み入つて居る譯でもなくて、實にキリストが其の樞石である事が解らないからで御座います。其故に一度キリストと彼の眞意とが解りさへすれば、聖書ほど面白い書は世の中にまたと無く、又此ほど読み易い書は無いやうになります。(座談)

全地よエホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ、欣喜をいだきてエホバに事へ、うたひつゝ、その御前にきたれ。知れエホバこそ神にますなれ。われらを造り給へるものはエホバにましませば我らはその屬なり。われらはその民その草苑のひつじなり。(詩篇百篇一―三節)

私の祈禱の大部分は祈願ではありません。私は先づ滿腔の感謝を以て私の祈禱を初めます。私は斯くも麗はしき宇宙に生を給ひし事に就て、私の神に感謝致します。私は私に良き友人を給ひし事に就て、私に身を委ぬべき事業を與へ給ひし事に就て、私に是非善惡を判別して正義の神を求むる心を與へ給ひし事に就て、殊に私が神より離れて私利私慾を追求せし時に當つて、私の心に主イエスキリストを現はし給ひて、私の靈魂を其の救済の途に就かしめ給ひし絶大無限の恩恵に就て深く感謝致します。さうして感謝の念が私の心に溢れまする時には、私は路傍に咲く堇のために感謝致します。私の面を吹く風の爲めに感謝いたします。亦朝早く起き出で、東天に黄金色の漲る時などは、思はず感謝の讚美歌を唱へる事も御座います。(座談)

多くの人々イエスと偕に行きしがイエス願みて彼等に曰けるは、凡そ我に來りてその父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも憎む者にあらざれば我弟子と爲ることを得ず。

(ルカ傳十四章二五、二六節)

憎むとは情實の羈絆を斷つ事である。即ち最も乾燥せる眼を以て彼等の利害を看ることである。即ち彼等の欲望の成されんことを希はずして、彼等に關する神の聖意の就らんことを欲することである。斯くならなくては眞正の孝子となることは出来ない。斯くならなくては眞正の父でもなければ夫でも兄弟でも姉妹でもない。君父の命とならば何事にも従はんと欲する支那的の忠孝は甚だ不實なる忠孝である。若し東洋人の忠孝なるものが國と家とを興したることがありとすれば、同じ忠孝によりて滅びたる國と家とは澤山あると思ふ。毒物と知りつゝ、老父の欲する酒を勧めて彼を死に至らしめし孝子もあらう。毒婦と知りつゝ、主君の愛する妾婢を彼に許して彼と彼の家とを顛覆せしめし忠臣もあらう。時によつては君を鞭つ位の臣でなければ眞正の忠臣と云ふことは出来ない。(感想)

それわれらは生來のユダヤ人にして異邦より出たる罪人にあらず。されど人の義とせらるゝは律法の行によるにあらず惟イエスキリストを信するに由るなるを知る。この故に我等も律法の行によらず、キリストを信するに由りて義とせられんが爲にイエスキリストを信す。蓋律法の行に由りて義とせらるゝ者なければなり。

(ガラテヤ書二章十五、十六節)

キリストの死に依て、神は身を神に託する (Believe, leave) — 即ち信する — ものを赦すを得るに至れり。神は赦し度きものを赦し得るに至れり。(神は何事も爲し得べしと雖も、正義に合はざる事は爲す能はず)。故にキリストは人の爲めにのみ生命を捨てずして、神の爲めにも死に給ひしなり。キリストは血の流るゝ手をひろげて人類に悔改めを勧め給ふと同時に、神が人類の悔改めを納れて彼等を赦すの途を開き給へり。キリストの十字架は實に恩恵の新源泉を開きたり。神はキリストに依て尙一層の神愛を自現し給へり。(求安)

トマス曰けるは、主よ我等なんちの往所を知らず何にして其の途を知らんや。イエス彼に曰けるは我は途なり、眞なり、生命なり、人もし我によらざれば父の所に往くこと能はず、若しなんぢら我を識ば我が父をも識るべし、今より汝等かれを識なり已に汝等彼を見たり。

(ヨハネ傳十四章五—七節)

・イエスの垂訓に組織立ちたる順序あるなし。彼は學者の如く熟思して眞理を發見し給はざりき。彼は世の創始より之を彼自身に於て有ち給へり。熟せる果實が枝より落つるが如くに眞理は彼の口より落ちたり。彼は眞理其物なれば、彼れ口を啓き給へば教訓は自然と彼より流れ出でたり。而して眞理とは實に如此きものならざるべからず。野の百合花の勞めず紡がずして色を呈し香を放つが如くに、イエスは學ばず究めずして深き眞理を世に供し給へり。雪山十二年の苦業の結果にあらず、ナザレ三十年の曇りなき成育の餘韻なり。之に清風の香氣あり、亦山を走る羚羊の自由あり。(感想)

汝ら善を求めよ悪を求めざれば汝ら生べし。また汝らが言ごとく萬軍の神エホバ汝らと偕に在さん。汝ら惡を惡み善を愛し門にて公義を立てよ、萬軍の神エホバあるひはヨセフの遺れる者を憐み給はん。(アモス書五章十四、十五節)

基督信者は柔和で慈悲深き者であります、さりごとく無主義、無節操、骨のな  
い海月のやうな者ではありません。彼は愛すべき者を愛すると同時に、憎むべき  
者をば憎みます。彼は東洋流の君子英雄とは全く違ひ、善も悪も美も醜も皆之を  
容れて我が物と爲す政治家的度量は有しません。彼は罪を黙許し惡を友とするこ  
とは出来ません。彼は罪人を憫みます。然し罪に對しては彼の滿腔の憎惡の情を  
發表し、少しなりとも惡を賛するが如き舉動を示しません。彼はまた何よりも偽  
善を憎みます。殊に神の名を利用して惡事を働く者の上には、彼は彼の滿心滿腹  
の憎惡を注ぎます。彼は縦し自分の身を引裂かるゝとも怒りは致しますまいが、  
然し偽善者の跋扈を見ては彼は憤怒に耐へません。彼は決して怒らない者ではあ  
りません。神の爲、正義の爲には燃やし盡すが如き熱火を以て怒ります。(座談)

然ば何と云ふぞ道は汝に近く汝の口にあり汝の心にありと。是すなはち我等が宣る所の信  
仰の道なり。蓋もし汝口にて主イエスを認はし、又なんぢ心にて神の彼を死より甦らし  
を信せば救るべし。それ、人は心に信じて義とせられ口に認はして救はるゝなり。聖書に  
凡て彼を信する者は辱められじと云り。(ロマ書十章八―十一節)

信、信、信と、安心も立命も信を措いて他に無いのである。信仰の結果ではな  
い、信仰其物である。信仰に由て疾病が癒るかも知れない、又癒らないかも知れ  
ない。然し癒らないとて、信仰はその救靈の價値を失はないのである。信仰に由  
て必しも人は道徳的に完全になるとは定らない。然し彼に猶ほ舊時の多くの缺  
點が存り居るとも、それが故に信仰は救靈唯一の能力たるを失はないのである。  
人が信仰に由て救はると云ふは、信仰の結果に由て救はると云ふのではない。信  
仰其物が既に彼の完全なる救拯であると云ふのである。(復活)

なんぢら悪魔の奸計を禦ん爲に神の武具を以て装ふべし。我等は血肉と戦ふにあらず。政また權威また斯世の幽暗を宰とる者また天の處にある惡の靈と戦ふなり。是故に武具を取るべし。是れあしき日に遇ひて敵を禦ぎ凡の事を成就して立ん爲なり。

(エペソ書六章十一—十三節)

我等キリストの福音を以て此世に立つ以上は、戦闘は全然之を避けんと欲するも能はない。我等は勿論他を苦しめんがために戦はない、又我が怨恨を齎さんがために闘はない。我等は勿論何よりも静肅を愛する。若し我が好愛を言はんには我等は終生聖書と天然とを友として、讚美と詩歌の生涯を送りたく欲ふ。然れども是れ御自身十字架を負ひて我等を罪より救出し給ひし所の主が我等に許し給はざる所である。我等は悪魔と奮闘せざるを得ない。而して其悪魔は單に裡なる靈の悪魔ではない、外なる肉の悪魔である、佞人である、奸物である、酒である、賄賂である、淫猥である、残忍である。我等は時には彼等の怒れる顔を恐れずして、「主は汝を憎み給ふ」と言ひて彼等を詰責しなければならぬ。(感想)

よろこびの音信をつたへ、平和をつけ、善き音信をつたへ、救をつけ、シオンに向ひてなんぢの神は統治めたまふといふ者の足は、山上にありていかに美しきかな。

(イザヤ書五二章七節)

詩人、地主に言うて曰く「土地は汝の所有なり、然れども風景は我が所有なり」。神の天然を樂むに、山林田野を我有とするの要なきなり。詩人、政治家に言うて曰く「政權は汝に在り、教權は我に存す」と。人の心を支配するに、軍隊、警察、法律、威力に據るの要なきなり。詩人、宗教家に言うて曰く「寺院と教會とは汝に屬す、然れども靈魂は我に歸す」と。人に神の愛を示し、救拯の恩恵を傳へ、聖靈の歡喜を供するに僧侶、神官、監督、牧師、傳道師たるの要なきなり。(所感)



神を敬ひて足ることを知るは大なる利なり。われら何をも携へて世に來らず亦何をも携へて往こと能ざるは明かなり。それ衣食あらば之をもて足とすべし。富まんことを欲する者は患難と皆また人を滅亡と沈淪に溺らす所の愚にして害ある萬殊の慾に陥るなり。

(テモテ前書六章六一九節)

汝の今日の業に安んぜよ。先づ大事業をなすの念を抛棄せよ。エレミヤその弟子バルクを戒めて曰く「汝己の爲めに大なることを求むるか、之を求むる勿れ」と。我等各々社會の教導者たらんことを欲するが故に、我等の革新事業は擧らざるなり。我等各自に革新すべき區域の供せられしにあらずや。汝既に安心立命の位置に立ちしとせんか、然らば先づ汝の家族に及ぼし、汝の友人を教化せよ。汝の隣人に慰藉の清水一杯を與へよ。汝に至る貧者をして、汝より善を施されずして汝の門前を立去らざらしめよ。我に勤めんとするの精神あらんか、我の今日の位置に於て爲すべきの業は積んで山をなせり。(傳道)

誠に實に汝等に告げん、我を信する者は我が行ところの業を行ん、且此より大なる事を行べし、蓋われ我が父へ往ばなり。(ヨハネ傳十四章十二節)

前あるを知らず、後あるを知らず、右あるを知らず、左あるを知らず、他あるを知らず、己あるを知らず、唯何者かゞ來つて我が心志を奪ひ、我が手を取り、我が情を激して、我をして私の欲はざる事をなさしむ。此時私の全身は燃え、我に知覺あつて無きが如し。我は何を爲し何を書きつゝあるやを知らず。唯知る、彼我を去りし後に、我は彼の手に在りて我以上の事を爲せしことを。(所感)

來れわれらエホバにかへるべし、エホバわれらを抓勞き給ひたれどもまた醫すことをなし、我等をうち給ひたれどもまたその傷をつむむことを爲したまふ可ければなり。エホバは二日の後われらを活かへし、三日にわれらを起せたまはん、我らその御前にて生ん。

(ホゼア書六章一、二節)

キリストの愛神主義は利他利己兩主義の上に超越して、最も多く他を利して最も多く己を利するの道を我に教へたり。我は罪を自覺して之を避くるを得べし。我は我に附與されし赦免は神の公義に戻らざるものなるが故に、我が全體の應諾を以て之に與るを得べし。我の求めんと欲する處のものにして、天の我に附與せざるものなし。造化は實に失敗ならざりしなり。エムマヌエル、神我等と共に在り。人生は一度通過するの價値あるものなり。(求安)

會堂の宰イエスの安息日に醫したる事を怒りこたへて衆人に曰ひけるは、事を爲すべきの日六日あれば其中に來りて醫さるべし、安息日に爲され。主かれに答へて曰けるは偽善者よ汝等おのゝ安息日には其牛や驢をととき既より牽出して水を飲さざるか、況て此婦はアラハムの裔なり、十八年サタンに縛られたる其結を安息日に解べからざらんや。

(ルカ傳十三章十四—十六節)

釋迦は婆羅門の破壊者であつて、キリストとパウロとは猶太教の破壊者であつた。ダンテとサボナローラとルウテルとは羅馬加特力教會を破壊し、ブラウンとウエスレーとデヨーヂ・フチャクスとは英國の監督教會を破壊した。破壊する事は時と場合とに依ては決して悪い事でないのみならず、甚だ必要なることである。もし西郷南洲や大久保甲東が舊幕時代の日本の社會を破壊しなかつたら如何であつたらう。我等日本人は今日此頃も尙ほ中古時代の迷夢の裡に昏睡して居たてはあるまいか。破壊を恐れるのは老人根性である。進歩を愛する者は、正當なる破壊を歓迎すべき筈である。(獨短)

イエスキリストに合はんとてバプテスマを受けし者は、即ち其死に合はんとて之を受けしなるを汝等知らざるか。故に我等その死に合ふバプテスマによりて彼と共に葬るゝは、キリスト父の榮によりて死より甦されし如く我等も新しき生命に行べき爲なり。若われら彼の死の狀に等からばまたかれの復生にも等かるべし。(ロマ書六章三―五節)

キリストに同化されし者、キリストの活ける體の一部分となりし者、其困苦と歡喜と、其恥辱と榮光と、其死と復活とを、彼の中に在て彼と偕に父なる神より分與せられし者、是れが基督信者である。「信する」とは此場合に於ては知識的に是認することではない。亦感情的に信賴することでもない。キリストを信ずるとは彼の神格の中に我が人格を投入することである。さうして我を無き者として彼をして我に代つて我が衷にあらしむることである。是れが即ち信の極であつて、キリストは我等より斯かる信仰を要求し給ふのである。キリストが神であり、靈の宇宙であり、我等が其靈界の一部分となるを得て、始めて我等の聖化も満足に行はれ、亦キリストの光は我等を通して世に顯はれるのである。(感想)

我むかし年わかして今老いたれど、義者のすてられ或はその裔の糧乞ひあるくを見しことなし。(詩篇三七篇二五節)

基督教は貧者を慰むるに、佛教の所謂「萬物皆空」なる麻酔的教義を以てするものに非ず。基督教は世をあきらめしめずして世に勝たしむるものなり。富めると貧なるとは前世の定にあらすして、今世に於ける個人的境遇なり。貧は身體の疾病と同じく、之を治する能はずんば喜んで忍ぶべきものなり。我の貧なる、若し我の怠惰放蕩より出でしものならば、我は今より勤勉節儉を事とし浪費せし富を回復すべきなり。天は自ら助くるものを助く。如何なる放蕩兒と雖も、如何なる惰け者と雖も、一度翻りて宇宙の大道に従ひ、手足を勞し額に汗せば、天は彼をも見捨てざるなり。貧は運命にあらざれば、我等手を束ねて之に甘んずべきにあらず。働けよ、働けよ。正直なる仕事は如何に下等なる仕事なりと雖も、之を輕んずる勿れ。(慰め)

イエス此を去りて故郷に到しに其弟子も彼に従ひぬ。安息日に及ければ會堂にて教を授けむ。衆人これを聞て奇み曰けるは如何して此人に斯の如き事あるか。誰より此智慧を授られて如此ふしぎなる業をも其の手より行か、彼は木匠にあらずや、マリヤの子ヤコブ、ヨセフ、ユダとシモンの兄弟にして其姉妹も此に我等と共に在るにあらずや。遂に人々かれに礙けり。(マコ傳六章一—三節)

彼は法王、監督、牧師、宣教師、神學博士の類にあざりき。彼は曾て頭に僧

冠を戴きしことなく、また身に僧衣を着けしことなし。即ち彼は今日世に稱する宗教家にあらず。彼は曾て彼の信仰のために俸給を受けしことなし。彼はナザレの一平民にして、彼の父の業を繼いで大工を職とせしものなり。故に彼は直覺的に神を識りし者にして、神學校または哲學館に彼の宗教的知識を養ひし者にあらず。余輩が彼を尊敬するは彼が大平民なりしが故なり。(獨短)

われら信仰によりて、諸の世界は神の言にて造られ、如此みゆる所のものは見るべき物に由て造られざることを知る。(ヘブル書十一章三節)

神を信する事は、讀んで字の如く神を信することなり。彼の存在を信じ、攝理を信じ、保護と指導とを信する、恰も吾人肉體の父のそれを信するが如くに信するを云ふなり。信するに口に云ふにあらず、實に信するなり。而して吾人處世の方針を全く此信仰に基きて定むるを云ふなり。詩人コレリツチ時の宗教家を評して曰く、彼等は信すると信する者にして、信する者にあらずと。信神の事決して容易のことにあらず。(獨短)

我らもさきには愚なる者、順はざる者、迷へる者、様々の慾と樂みの奴隷となれるもの、恨み妬みて日を送りしもの、惡むべきもの、また互に惡みあへる者なりし也。されど我らの救主なる神の慈と人を愛し給ふ愛の顯はれし時、かれ我等が行ひし所の義しき功に由らず惟その矜恤に循ひ、生れかほりの洗と聖靈に由りて新たにすることをもて我らを救へり。

(テトス三章三―五節)

余は余が好んで救はれたのではない、余は余の意に逆つて救はれたのである。余は現世を愛した。然るに神は現世に於ける余の凡ての企圖を破壊し給ひて余をして來世を望まざるを得ざらしめ給うた。余は人に愛せられん事を希うた。然るに神は多くの敵人を余に送つて、余をして人類に就て失望せしめて、神に頼らざるを得ざらしめ給うた。若し余の生涯が余の望みし通りのものであつたならば、余は今神もなき來世もなき、普通の俗人であつたであらう。余は神に餘儀なくせられて神の救済に與つたものである。故に余は余の救はれしことに關して何の誇る所のない者である。(所感)

神その翮を以て汝を庇ひ給はん、汝その翼の下に隠れん、その眞實は盾なり干なり。

(詩篇九一篇四節)

神の命を待てよ、然らば何事も行はれん。身を神に任せよ、然らば凡ての力は汝に加へられん。汝は神の屬にして汝の事業は神の事業ならざるべからず。是故に汝に計劃なるものあるべからず。汝に焦心憂慮の要あるなし。神は彼自身に活動する者なれば、吾人は全身を彼に献ぐれば足る。自から計り、自から行はんと欲して吾人は神より離絶する者なり。而して斯く爲して偉大なる行爲の吾人の手に依て成らざるは勿論なり。吾人若し人に對し活動的たらんと欲せば、神に對しては全然受動的たらざるべからず。(所感)

何事を思ふにも黨を結び或は虚榮を求むる心を懐くべからず、各謙りたる心を以て互に人を己に愈りと爲よ。又おのゝ己が事のみを顧みず人の事をも顧みよ。汝等キリストイエスの意を以て意とすべし。(ピリピ書二章三―五節)

キリストのやうな生涯は、悪人に殺されるれば、夫れで終りになるもので御座いませうか。若しキリストが復活しないで、彼の生命も空しくエダの山地の塵となつて消え失せて仕舞うたものならば、此の宇宙とは何と頼み少なき處ではありませんか。然し之れはさうでは御座いません。謙遜なる事キリストの如き者の生涯は、永遠にまで存在する價値のあるもので御座います。さうして我々の生涯と雖も、彼の生涯に倣へば同じく永久の性を帯ぶる事が出来ます。即ち永生とは實に謙下の結果であります。キリストのやうに謙遜なるを得れば、我々も永生に入る事が出来ます。(座談)

キリスト既に我等の爲に肉體に苦難を受給ひたれば汝等もまたその心を以て自ら鑑ふべし。そは肉體に苦を受し者は罪を斷ちたればなり。これ今より後人の慾に循はず神の旨に循ひて肉體に寓れる餘時を過さん爲なり。(ペテロ前書四章一、二節)

死は犠牲である、同時にまた贖罪である。何人と雖も己一人のために生き、又己一人のために死する者はない。人は死して幾分か世の罪を贖ひ、其犠牲となりて神の祭壇の上に献げらるゝのである。是れ實に感謝すべき事である。死の苦痛は決して無益の苦痛ではない、之に由りて己の罪が洗はるゝのみならず、又世の罪が幾分なりとも除かるゝのである。而して言ふまでもなく、死の贖罪力は死者の品性如何に由りて増減するのである。義者の死は多くの罪を贖ひ、悪者の死は自己の罪の外贖ふ所は甚だ僅かである。人は聖くなれば聖くなるだけ其死を以て此世の罪を贖ふことが出来るのである。或は家の罪を、或は社會の罪を、或は國の罪を、或は世界の罪を、人は彼の品位如何に由りて擔ひ且つ贖ふことが出来るのである。死は實に人が此世に於て爲すを得る最大事業である。(復活)

其所の學者とパリサイの人イエスの弟子に怨言き曰ひけるは、汝等税吏また罪ある人々と共に飲食するは何故ぞ。イエス答て曰けるは、康強なる者は醫者の助を需めず惟病ある者これを需む、わが來るは義人を召く爲にあらす罪ある人を召きて悔改せんが爲なり。

(ルカ傳五章三十一—三二節)

キリストは罪人の友であると云ふ、洵に其通りである。キリストは税吏、罪ある者の友であつた。併し乍ら罪人の友であると云ふのは悪人の友であると云ふ事ではない。キリストは悪人の友ではない。人は悪をなしてキリストの敵となるのである。キリストが罪人の友であると云ふは、彼は世が稱して以て罪人となす者の友であると云ふのである。即ち自ら罪を悔いて神に赦されし者、或は身に罪を犯せし事なきも、世の慣例習俗に従はざるの故を以て罪人として世に目せらるゝ者、或は人の猜む所となりて罪なきに罪ありと稱ばるゝ者……キリストは斯かる罪人の友であると云ふ事である。即ちパリサイ人が稱して以て罪人と見做す者の友であると云ふことである。(感想)

この道は歴世隠れたる奥義なりしが今その聖徒に顯れたり。神聖徒をして異邦人の中に顯れし奥義の榮のいかに豊なるを知らしめんとし給へり。此奥義は汝等の中に傳へしキリストなり。彼は汝等の望む所の榮の望なり。我等かれを傳へ諸人を勧め諸般の智慧をもて諸人を教へ、諸人をしてキリストの中に完全を得て神の前に立しめんとす。

(コロサイ書一章二六—二八節)

聖書は大なり。然れども活けるキリストは聖書よりも大なり。我儕もし聖書を學んで彼に接せざれば、我儕の目的を達せりと云ふ能はず。聖書は過去に於ける活けるキリストの行動の記録なり。而して我儕は今日彼の靈を接けて新たに聖書を造らざるべからず。古き聖書を讀んで新しき聖書を造らざる者は、聖書を正當に解釋せし者に非ず。聖書は猶ほ未完の書なり。而して我儕は之に其末章を作るの材料を供せざるべからず。(所感)

讃べきかな神われらの主イエスキリストの父、かれ其大なる矜恤を以て我等を再び生み、我等をしてイエスキリストの甦り給ひしことによりて活る望を得させ、またわれらの爲に天に藏めある朽ちず汚れず衰へざる嗣業を得しめ給ふなり。(ペテロ前書一章三、四節)

信者は安心して死に對すべきである。必しも生を求めず、又必しも死を願はず、生くるも主のため死するも主のためである。死すべき時に死するは大なる恩恵である。もし徒らに生を希うて、死すべき時に死なざれば不幸是より大なるはない。死すべき時に死するの死は光明に入るの門である。死は最大の不幸なりと謂ふは、信者の謂ふべき事ではない。彼はたゞ死すべき時に死なんことを願ふのである。其時よりも早からず、其時よりも遅からず。(復活)

エホバをおそるゝものにエホバの賜ふそのあはれみは大にして天の地よりも高きが如し。そのわれらより愆をとほざけたまふことは東の西より遠きが如し。エホバの己をおそるゝ者をあはれみたまふことは父がその子をあはれむが如し。エホバは我等のつくられし状を知り、われらの塵なることを念ひたまへばなり。(詩篇百三篇十一—十四節)

余は未だ能く神の何者たる乎を知らず、然れども其の余の悪を憎み給ふに優りて余の善を愛し給ふ者なるや敢て疑ふべきにあらず。余が終末の裁判の日に於て神の前に立つや、余の悲歎は余の悪の多き事にあらずして、余の善の尠き事ならん。而して余は其時余の豫想に反して、愛なる神が余の犯せし凡ての悪を忘れ給ひて、唯だ余の行せし些少の善をのみ記憶し給ふを發見して驚愕の念に堪へざるべし。「神の恩恵の廣きは海の廣きが如く廣し」。吾等神の忿怒に就てのみ念ずるは誤れり。神は忿怒の神に非ず、恩恵の神なり、即ち赦免の神なり。(所感)



主エホバの靈われに臨めり、こはエホバわれに膏をそゝぎて貧しき者に福音をのべ傳ふることをゆだね、我を遣して心の傷める者をいやし、俘囚にゆるしをつけ縛められたるものに解放をつけ、エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告しめ、又すべて哀しむ者をなぐさめ、灰にかへ冠をたまひてシオンの中のかなしむ者にあたへ、悲哀にかへて歡喜のあぶらを予へ、うれひの心にかへて讚美の衣をあたへしめたまふなり。

(イザヤ書六一章一—三節)

我は我に口あるを感謝す、我は之を以て神の福音を宣べん。我は我に手あるを感謝す、我は之を以て神の福音を傳へん。我は我に足あるを感謝す、我は之を以て神の福音を運搬ばん。我は福音のために造らる。我は其傳播の器具たるべし。

(所感)

子父に曰ひけるは父よ我天と爾の前に罪を犯たれば汝の子と稱ふるに足らざるなり。父その僕等に曰けるは至も美服を携來りて之に衣せ其指に環をはめ其足に履を穿せよ、また肥えたる犢を牽來りて宰れ、我等食して樂まん。(ルカ傳十五章二一—二三節)

汝は言はんどす「我の如き罪人いかで無限の愛を受くべけんや。我先づ己を清くして然る後神の愛を以て充たさるべきなり」と。嗚呼誰か汝を清くし得んや。汝は己を清め得ざりき。汝を清め得るものは唯神のみ。汝の清まるを待ちて神に來らんとせば、永遠まで待つも汝は神に來らざるべし。母の手より離れて泥中に陥りし小兒は、己を洗淨する迄は母の許に歸らざるか。泥衣のまゝ泣いて母に來るにあらずや。而して母はその子が早く來らざりしを怒り、直ちに新衣を取つて無知の小兒を装ふにあらずや。永遠の慈母も亦然せざらんや。(求安)

汝等おのゝ終に至るまで疑を懐かざる望を保んが爲に、以前と同じ慰勉を表し、怠らずして、かの信仰と忍耐を以て約束を嗣る者に倣はんことを我等欲へり。

(へブル書六章十一、十二節)

「凡ての事はれ信じ」(コリント前書十三章七節)とは何事によらず之を信すとの意にあらず。凡ての事はれ信じとは、凡ての善き事はれ信すとの意なり。余輩は天に愛の父の在すを信す。余輩は罪の赦免を信じ、靈魂の不滅と肉體の復活を信す。余輩は又萬物の復興と天國の來臨とを信す。余輩の信すべからざる事は惡が終に世に勝たんとする事なり。此世が全滅に歸して混沌の再び宇宙を掩ふに至らんとする事なり。信仰は希望なり。善を望まざる信仰は信仰にして信仰にあらずなり。(所感)

なんぢの大庭にすまふ一日は千日にまさされり。われは惡の幕屋にをらんよりは寧ろわが神のいへの門守とならんことを欲ふなり。そは神エホバは日なり盾なり。エホバは恩と榮光とをあたへ直くあゆむものに善物をこばみたまふことなし。萬軍のエホバよなんぢに依頼むものはさいはひなり。(詩篇八四篇十一、十二節)

地に屬するものが余の眼より隠されし時、初めて天のものが見え始まりぬ。人生終局の目的とは如何、罪人が其罪を洗ひ去るの途ありや、如何にして純清に達し得べきか、此等の問題は今は余の全心を奪ひ去れり。榮光の王は神の右に坐して、ソクラテス、パウロ、クロムウエルの輩、數知れぬ程御位の周圍に坐するあり。荆棘の冠を戴きながら十字架に上りしイエスキリスト、來世存在を論じつゝ、從容として毒を飲みしソクラテス、異郷ラベナに放逐されしダンテ、其他夥多の英靈は今余の親友となり、詩人リヒテルと共に天の使に導かれつゝ、球より球まで、星より星まで、心靈界の廣大を探り、此地に咲かざる花、此土に見ざる寶玉、聞かざる音楽、味はざる美味……余は實に思はぬ國に入りぬ。(慰め)

なんぢら信仰によりて神の能に護られ已に備へある所の末時に顯れんとする救を得るなり。之に由て汝等喜べり。今暫く各様の艱難に遇ひて憂ざるを得ずと雖も却て喜をなせり。(ペテロ前書一章五、六節)

神の聖業は今猶ほ其半途に於て在るのである。彼は今その畑に永生の種を播き給ひつゝあるのである。今より後に復活あり、地の改造あり、大審判ありて、然る後に彼の救済の聖業は終り、而して最後に新しき天と新しき地との實現を見るのである。言あり曰く一神の水車は轉ること緩かなり、然れども挽くこと精巧なり。神は急ぎ給はない、多く時を取り給ふ。彼の眼には千年も一日の如し。萬年も長き時に非ず。而かも彼はその愛する者を忘れ給はない、その始めし善工を終らずしては止み給はない。人の眼より見て今より救済の結末、完成されたる天地の實現を俟つは耐へ難き忍耐ではあるが、然し神は人が明日を期するが如くに其福ひなる時を待ち給ふのである。(復活)

それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是天地の主なれば手にて造れる殿に住たまはず。かつ衆人に生命と氣息と萬物を予たまへば物に乏しきことなし。人の手にて事らるゝものにあらず。また此神は凡の民を一の血よりつくり、悉く地の全面に住ませ、預じめ其時と住ところの界とを定め給へり。此は人をして神を求めしめ彼等が或は揣摩うる事あらん爲なり。然ども神は我等各人を離るゝこと遠からざるなり。(使徒行傳十七章二四—二七節)

余は神は在ると信ずる。其最も確かなる證據は余自身が存在することである。余は余の父母を通して世に生れ來つた者であるが、然し余には余の父母が生むことの出來ないものがある。即ち余には余の靈魂がある。即ち獨り斷じて獨り行ふ所の者がある。是れは余の父母とは何の關係もない者であつて、是れは直に神より出で來つた者である。是が即ち余自身であつて、余の人格である。余の肉體の變遷と同時に變遷せざるもの、余の責任の存する所、余の不朽の部分、自我の中心點、余は斯かる玄妙なる者の余の衷に在るを知るが故に神の存在を信じて疑はないのである。(感想)

彼は我等の和なり。二者をひとなし冤仇となる隔の籬を毀ち、律法の中に命ずる所の法を其肉體にて廢せり。蓋二者を己に聯ね之を一の新しき人に造りて和がしめ、また十字架を以て冤仇を滅し又これを以て二者を一體となして神と和がしめん爲なり。

(エペソ書二章十四—十六節)

茲に如何なる手段を以てしても怒らすことの出来ない唯一人の人があつた。棘の冠を被らせても、掌を以て打つても、睡きしても、十字架につけても、怒らす事の出来ない一人の人があつた。憤怒の颯風は吹かば吹け、此愛の巖を動かすことは出来なかつた。憎惡の潮は來らば來れ、此愛の堤を崩す事は出来なかつた。キリストの死は憎惡に對する愛の勝利であつた。茲に憎惡は非常の勢力を以て愛と衝突してその撃退する所となつた。今より後ち憎惡はその猛威を誇ることは出来ない。既に一回人の子の打破る所となりて、その殲滅は既に宣告せられた。キリストの愛の死に由て世界平和の端緒は開かれた。キリストは十字架に上りて、愛は最高の位に即いた。(研)

惰者よ蟻にゆき其爲すところを觀て智慧をえよ。蟻は首領なく有司なく君王なけれども、夏のうちに食を備へ、收穫のときに糧を斂む。惰者よ汝いづれの時まで臥し息むや、何れの時まで睡りて起きざるや、しばらく臥ししばらく睡り手を叉きてまた片時やすむ、さらば汝の貧窮は盜人の如くきたり汝の缺乏は兵士の如くきたるべし。(箴言六章六—十一節)

勤勞の報酬は満足されたる良心なり。更に盡さんと欲するの決心なり。智能の益々明瞭を加ふることなり。慾心の滅することなり。生存其者に興味を感じることなり。未來の恐怖の絶ゆることなり。萬物の靈長たる人類は是より以下の報酬を以て満足すべからざるなり。(獨短)

わが心を勞するは彼等が心愛に因て一になり、疑を懐ざる全き穎悟の富を得、かつ父なる神とキリストの奥義を知りて安慰を得んことを欲するなり。智慧と知識の蓄積は一切キリストに藏れあるなり。(コロサイ書二章二、三節)

キリストは余に自己を賜うた。彼に在る生命を賜うた。聖靈を賜うた。神と人との愛する心を賜うた。忍耐と希望と歡喜とを賜うた。然り彼は余に神を賜うた。而して神と共に宇宙萬物を賜うた。彼は余の死せる靈魂を活かし給うて、余をして内に富み且つ慧き者とならしめ給うた。夫れ故にキリストは余のすべてである。余の食物又衣服又家屋である。彼は又余が神の前に立つ時の誇り(勳章)である。彼は又余の知識である。彼は又余の「曙の星」であつて、余の歌の題目、美術の理想である。彼は又余の自覺の根柢であるから、余の哲學と倫理との基礎である。キリストは余に自己を與へ給うて余に萬物を與へ給うた。(感想)

是に因て人々イエスに曰ひけるは我等如何なる事を行ば神の工になるべきや。イエス答へて彼等に曰けるは神の遣しし者を信するは即ち其工なり。(ヨハネ傳六章二八、二九節)

義務よ、義務よと叫ぶものは、能く義務を果たす人にあらざるなり。義務の念は重荷となり、心志を壓してその活動力を減殺するものなり。如何に面白き學科と雖も學校の課目となりて強ひらるゝ時は、その快味却て苦味と變ずるが如く、如何に高尚なる事業なりと雖も、義務として之に當る時は、乾燥無味の奴隸的事業と變ずるなり。基督信者の大事業家たり得るは、彼は既に事業を遂げし者なればなり。神の前に既に義とせられて、人の前に名譽を博するの必要なければなり。恰も億萬の富を有して金錢を得るの必要なものは、常に商業界に於て勝利を得るものなるが如し。(求安)

汝等は皆キリストイエスを信するによりて神の子となれり。そは凡そバプテスマを受けてキリストに入れる汝等はキリストを衣たる者なればなり。斯る者の中にはユダヤ人またギリシヤ人、あるひは奴隸あるひは自主、あるひは男あるひは女の分なし、蓋なんぢら皆キリストイエスに在りて一なればなり。(ガラテヤ書三章二六―二八節)

我は世に我の讐敵のあることを思はずして、我の同情者のあることを思ふ。我は世に我の瑕瑾を探り索むる批評家のあることを思はずして、我の眞意を理解する愛友のあることを思ふ。そは敵意は我の意を縮め、友情は之を寛めて我をして人生を厭はざらしむればなり。これ己惚の如くに見えて然らず。今日の如く人々皆「四海讐敵」なりとの念を懐く時に際しては、我が心中に人類に對する温き愛情を保有するの必要あり。(獨短)

なんぢの荷をエホバにゆだねよ、さらば汝をさへたまはん。たゞしき人の動かさるゝことを常にゆるしたまふまじ。(詩篇五五篇二二節)

「汝の重荷をエホバに委ねよ」、自身之を負はんとする勿れ。自ら之を擔はんとするが故に汝に堪へ難きの苦痛あるなり。之をエホバに委ねよ、彼は容易く之を擔ひ得るなり。而して汝の重荷を汝に代て擔ひ給ふに止まらず、之と共に汝自身をも擔ひ給ひて汝の心に平康を賜ふなり。彼は義人、即ち彼に依頼む者、即ち彼と義しき關係に於て在る者の動かさるゝことを決して允し給はざるべし。然り、決して允し給はざるなり。世の謂ゆる義人の動くことあり、然れども神の義人の動くことなし。神の義人は信仰の人なり、信賴の人なり、義を神より仰ぐ人なり。我は義人なりと云ふ人にあらず、罪人なる我を憐み給へと云ひて神の慈愛に絶る者なり。而して斯かる者は決して動かさるゝことなし。(舊約)

凡てキリストイエスに在りて神を敬ひつゝ世を渡らんと志す者は窘を受くべし。

(テモテ後書三章十二節)

基督信者の歡喜に伴ふ基督信者の苦痛があります。迫害、飢餓、裸程、危険、刀劍、其他言ふに言はれぬ苦痛、教會よりは放逐され、父母兄弟よりは惡人として侮辱され、殆ど唾きせられ、然れども擔ふべきの義務はすべて擔はせられ、國人よりは國賊として斥けられ、友人には偽善者として敵に付され、しかも之に對して一言の怨恨を述べることは出來ず、只羔の如くに忍ばなければなりません。その屈辱、その悲痛、到底常人の忍び得る所ではありません。我等基督信者は基督と共に榮に入るの特權のみならず、亦キリストと共に十字架に上げられるその苦痛を授けられた者であります。(問答)

されば我等に雲霄を通りて昇りし大なる祭司の長すなはち神の子イエスあり、故に我等信する所の教を固く持つべし。蓋われらが荏弱を體恤こと能ざる祭司の長は我等にあらす、彼は凡の事に我等の如く誘はれたれど罪を犯さざりき。是故に我等恤をうけ機に會ふ助となる恩恵を受ん爲に憚らずして恩寵の座に來るべし。(ヘブル書四章十四—十六節)

余はキリストが余に代りて成し就げ給ひし善行に由て救はれるのである。余が大膽にも多くの余不相應の要求を以て神に近づき得るは、全くこれがためである。如何に慈愛深き神なればとて、余は余のために余を恵み給へと言ひて彼に近づくことは出來ない。然しながら、キリストのために余を恵み給へと言ふのであるならば、余の如き者と雖も、大膽にアバ父よと叫びながら神の寶座に向つて進み行くことが出来る。余は余のために何物をも要求する資格をもたない。併しながら、キリストのためとならば、萬事を父に向て要求することが出来る。(研)

エホバ言ひ給ひけるは、出でエホバの前に山の上に立てと。茲にエホバ過ゆき給ふに、エホバのまへに當りて大なる強き風山を裂き岩石を碎きしが、風の中にはエホバ在さざりき。風の後に地震ありしが、地震の中にはエホバ在さざりき。又地震の後に火ありしが、火の中にはエホバ在さざりき。火の後に靜なる細微き聲ありき。

(列王記略上十九章十一、十二節)

聖靈の充分なる降臨は當人の全生涯に渉る神の聖働である。この不完全なる且つ小なる我は、一時に聖き窮りなき神の靈を受くることは出来ない。初に苗、次に穂出で、穂の中に熟したる穀を結ぶと云ひ(マコ傳四章二十八節)、誠命に誠命を加へ、度に度を加へ、此處にも少しく、彼處にも少しく教ふと云ふ(イザヤ書二十八章十節)。健全なる聖靈の降臨は徐々たる降臨である。我らの願ふべきことは、其一時に迅風の如くに降らずして、永く軟風の如くに戦がんことである。雷火の如くに臨まずして、朝の露の如くに潤さんことである。萬止むを得ざる場合の外は、我に急激の變化を來さざらんことである。(研)

汝等は選ばれたる族、王なる祭司、聖き民、神に屬ける者なり。此は汝等をして召て幽暗より出だし其異光に入給ひし者、己の徳を顯さしめん爲に汝等を此の如き者となし給へるなり。汝等は素民に非ず、されど今神の民となる。素矜恤を受けず、されど今矜恤を受けたり。(ペテロ前書二章九、十節)

基督信者とは勿論キリストを信する者である。然し彼は實は自から信じて信者となつたのではなくして、神に信せしめられて信者と成つたのである。彼の信仰は救済の結果であつて、信仰が救済の原因であるのではない。「汝等の信するは神の大なる能の感動に由るなり」とは聖書が力を籠めて宣傳ふる所であつて、我等は信仰に由て救はると云ふものゝ、其信仰其物が神の特別なる恩賜であることを我等は決して忘れてはならぬ。(感想)



ユダヤ人は休徴を乞ひギリシヤ人は智慧を覓む、我等は十字架に釘られしキリストを宣傳  
ふ。即ち此はユダヤ人には癡く者ギリシヤ人には愚なる者なり。然ど召れたる者にはユダ  
ヤ人にもギリシヤ人にもキリストは神の大能また神の智慧なり。

(コリント前書一章二二―二四節)

パウロ曰く神は愚者を以て智者を辱かしむと。宗教家は神と人との間に立つ取  
次人なれば、彼は自己の智慧を以て此地位に立たむと欲すべからざるなり。大宗  
教家の怜悯なる人に尠くして、却て朴訥なる人に多き所以は、蓋し此點に存する

こと、信するなり。或論者の如く、ルーテルを以て先見博聞の人と見做すが如き  
は、大なる誤謬なり。彼の事業は神の事業にして、彼の偉大なりし所以は、偏に  
彼の自ら力なきを覺り全く神に依頼せしに由るなり。(傳道)

汝らの敵を愛しみ、汝らを誣ふ者を祝し、汝らを憎む者を善視し、虐遇迫害る者のために  
祈禱せよ、かくするは天に在す汝らの父の子とならんためなり。

(マタイ傳五章四四、四五節)

愛、愛、我らの希ひ求むべきものは是である。權能は要らない、有つて甚だ危  
険である。智慧は要らない、有つて却て我らを迷はす。要るものは愛である。敵  
を倒すための權能ではない、我を倒さんとする我敵を愛する愛である。是れ我等  
の最も要求すべきものである。我等基督信者は權能を以て自ら守らんごしない。  
「愛の中に恐怖あることなし、全き愛は恐怖を除く」とあれば、我等は愛を以て敵  
に向はんとする。我等は權能の足りないのを歎かない。愛の足りないのを悲む。  
愛を以て溢れさへすれば、天上天下怖るべき者は一もない。(研)

たゞこれのみならず患難にも欣喜をなせり、それは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるを知る。こは我等に賜ふ所の聖靈によりて神の愛われらの心に灌漑ばなり。(ロマ書五章三一五節)

忍耐と云へば普通辛い事と思はれて居る、我慢すること、思はれてゐる。基督信者の忍耐とは爾んなものではない。基督信者の忍耐とは優に耐えると云ふことである。即ち神に依て、希望を以て、歡びつゝ何の苦をも感ずることなく、耐ゆると云ふことである。大船が波濤に耐ゆるやうに、大厦が地震に耐ゆるやうに、一種の快味を以て世の苦痛に耐ゆることである。是を忍耐と云ふのは耐ゆると云ふ意味から然う云ふのである、忍ぶと云ふ意味から云ふのではない。若し基督信者の忍耐を意義なりに表はさうとするならば、之を歡耐と云ふのが適當であると思ふ。彼の信仰の充實する時には我慢、辛抱の意味に於ての忍耐は彼には無い筈である。(感想)

我等は主イエスを甦らしし者のイエスと偕に我等をも甦へらせ、亦我等をして汝等と偕に立たしむる事を知れり。(コリント後書四章十四節)

余は此の世より救に入らんと欲する、然し此の世に於て救はれんとは欲しない。即ち余の靈も肉もこの世に於て完全なる者とならんと望まない。體は罪に縁りて既に死し、肉體は既に罪の故を以て死に定められたる者である。醫術が其進歩の極に達することも、此「死の體」が永久に活くるに至りやう筈はない。壞つべき肉體に宿ること其事が現世の頼るに足らざる最も明白なる證據である。余は死より救はれんと欲する者である。即ち靈に於ては勿論、體に於ても死せざるの境に入らんと欲する者である。さうして斯かる境遇は勿論此世に於て求められ得べき者でない。「キリスト死を廢し、福音を以て生命と壞ちざる事を明かにせり」。さうして此生命と壞ちざる事とは、彼が再び顯はれ給はん時に、我等に事實となりて顯はるべきものである。(感想)

或人きたりて彼に曰けるは、善師よ我がきりなき生を得んが爲には何の善事を行べきか。彼に曰けるは何故われを善と稱ふや、一人の外に善者はなし即ち神なり、苦し生命に入んと欲は誠を守るべし。(マタイ傳十九章十六、十七節)

何をか善と云ふとの問題に對して、キリストは「善とは神なり」と答へ給へり。孝も善なり、仁も善なり、然れども孝も仁も善の結果にして、善其物は神なり。神を知るは善人となる事也。善を學ぶは神に近づく事也。善を求めずして神を知る能はず、神を知らずして善なる能はず。宗教と道德、行と信仰とは同一物の兩面にして、一を去つて他を知る能はざるなり。聖書は善人を以て「神と共に歩む者」(創世記五章二三節)となせり。神を離れて偶像に仕ふるは善を去つて惡を行ふなり。即ち惡を行ふは眞正の偶像崇拜なり。基督教徒にまれ、佛教徒にまれ、義を重んじ、正を求むるものは、神の子供にしてイスラエルの世嗣たるなり。(求安)

聲きこゆ云く、よばはれ。答へていふ何とよばはるべきか。いはく人はみな草なり、その榮華はすべて野の花のごとし、草はかれ花はしほむ、エホバの息その上に吹きければなり。實に民は草なり、草はかれ花はしほむ、然れどわれらの神のことは永遠にたゞん。

(イザヤ書四十六章一八節)

人をして衆人の誹毀に對し自己の尊嚴と獨立とを維持せしむるに於て無比の力を有するものは聖書なり。聖書は孤獨者の楯、弱者の城壁、誤解人物の休息所なり。之に依てのみ、余は法王にも、大監督にも、神學博士にも、牧師にも、宣教師にも抗する事を得るなり。余は聖書を捨てざるべし。他の人は彼等に抗せんために聖書を捨て聖書を攻撃せり。余は余の弱きを知れば、聖書なる鐵壁の後に隠れ、余を無神論者と呼ぶもの、余を狼と稱するものと戦はんのみ。何ぞ此堅城を彼等にゆづり、野外、防禦なきの地に立ちて、彼等の無情、淺薄、狹量、固執の矢に此身を曝すべけんや。(慰め)

若し人全世界を得るとも其の生命を失はゞ何の益あらん乎、また人なにを以て其の生命に易へんや。(マタイ傳十六章二六節)

個人とは個々の靈魂である。之を英語で individual と云ふ、分つべからざる者の意である。恰も理化學で分子のことを atom と云ふと同じである。分子即ちアトムは是れ以上分つべからざる者である。その如く個人も靈的實在物として是れ以上に分つべからざる者である。人類は之を人種に分つことが出来る。人種は之を國民に分つことが出来る。國民は之を階級に分つことが出来る。階級は之を家族に分つことが出来る。さうして家族は之を個人に分つことが出来る。併し乍ら分離は之を個人以下に及ぼすことは出来ない。個人は分つべからざる者である。個人は人そのまゝである。神の子、永久の存在者、自由獨立不滅の固有性を有し、全世界を代價に拂ふても贖ふことの出来ない程、貴いものである。(研)

此れに因りて我れキリストの爲に懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭ふを樂しみとせり、そはわれ弱き時に強ければなり。(コリント後書十二章十節)

我は恒に我力の足らざらんことを懼れ、神は恒に我力の足り過ぎんことを慮り給ふ。我は我れ強からざれば弱しと思ひ、神は我れ弱からざれば強からざるを知り給ふ。我は我力を増さんと欲し、神は我力を殺がんと欲し給ふ。我が意ふ所は常に神の見る所と異なる。我の焦慮する時に神は笑ひ給ふ。我は己を知らずして恒に自から苦惱むものなり。(所感)